

赤十字シンポジウム

RED CROSS SYMPOSIUM 2009

人を思いやる力～キズナの傷んだ世界に～



人間を救うのは、人間だ。 Together for humanity



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

RED CROSS
SYMPOSIUM
2009
REPORT

報告書

赤十字シンポジウム

RED CROSS SYMPOSIUM 2009

人を思いやる力～キズナの傷んだ世界に～

日時

2009年10月24日（土）

●開場:午後0時30分 ●開演:午後1時30分 ●終了:午後4時

会場

東京国際フォーラム ホールB5

東京都千代田区丸の内3-5-1

主催



NHK

後援

外務省 厚生労働省 NHK厚生文化事業団

放送日時

2009年12月5日（土）NHK教育テレビ午後4時～午後5時

同時開催

赤十字国際委員会（ICRC）写真展

OUR WORLD AT WAR ～「戦い」を生き抜く人々～

（ホールB5ロビーにて）

この報告書は、2009年10月24日（土）に行われた
「赤十字シンポジウム2009」の議論をまとめたものです。

今年は「赤十字思想誕生150周年」「Our World. Your Move.」を全世界のスローガンに。

Our world. Your move.

赤十字思想誕生150周年

赤十字の創設者・アンリー・デュナンが1859年、イタリア・ソルフェリーノの戦いで敵味方の区別なく傷ついた兵士を助けてから150年。2009年は「赤十字思想誕生150周年」を記念し、日本を含む186カ国の赤十字が「Our World. Your Move.」をスローガンに、一人ひとりが世界をよくするために行動を起こそうと呼びかけます。世界赤十字デーの5月8日を皮切りにさまざまな活動を展開していきます。



Akira IKEGAMI

Coordinator

コーディネーター

池上 彰 ジャーナリスト

長野県松本市生まれ。1973年NHKに記者として入局。記者や通信部、報道局社会部で勤務した後、「ニュースセンター845」、「イブニングネットワーク」のキャスターを務める。1994年から「週刊こどもニュース」編集長兼キャスターを務め、2005年にNHKを退職。現在はジャーナリストとして、海外取材や執筆を中心に活動。主な著書に、『そうだったのか!現代史』、『伝える力』、『わかりやすく伝える>技術』など。



Sang-jung KANG

Panelist

パネリスト

姜 尚中 東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授

1950年、熊本県熊本市に生まれる。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。旧西ドイツ、エアランゲン大学に留学の後、国際基督教大学助教授などを経て、現在東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授。専攻は政治学、政治思想史。テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍。主な著書に『オリエンタリズムの彼方へ—近代文化批判』、『マックス・ウェーバーと近代』、『ナショナリズムの克服』、『姜尚中の政治学入門』、『日朝関係の克服』、『在日』、『ニッポン・サバイバル』、『愛国の作法』、『悩む力』など。公式ホームページ <http://www.kangsangjung.com/>



Kanae DOI

Panelist

パネリスト

土井香苗 国際NGOヒューマン・ライツ・ウォッチ 日本代表、弁護士

1975年神奈川県生まれ。司法試験合格後、ボランティアとして、独立したばかりのアフリカの国エリトリアへ。エリトリア法務省で1年間法律作りのお手伝い。1998年東京大学法学部卒。2000年から弁護士になり、日本にいる難民の支援や難民認定法の改正のロビーイングにかかわる。2006年6月米国ニューヨーク大学ロースクール修士課程終了(国際法)。2007年米国ニューヨーク州弁護士。2006年から国際NGOヒューマン・ライツ・ウォッチのニューヨーク本部のフェロー。2008年9月から日本代表。



Akane OSAWA

Panelist

パネリスト

大沢あかね タレント

大阪府出身。早くから子役モデルで活動、子役タレントとしてNHK教育「天才てれびくん」にも出演していた。素顔は、気づかひの出来るやさしい女性で、現在もラジオ、テレビなどで活躍中。2009年は、自叙伝「母ひとり、娘(こ)ひとり」(幻冬舎)の出版、結婚、舞台「ゼブラ」での四姉妹の一人を好演など、色々と新しいことに挑戦し、活躍の場を広げている。2009年度下期 東京消防庁「秋の火災予防運動ポスター」ポスターモデル
趣味: 読書、音楽、映画鑑賞 特技: ジャズダンス、料理



Tadao INOUE

Panelist

パネリスト

井上忠男 日本赤十字秋田看護大学教授、同国際人道法教育センター長

1976年早稲田大学商学部卒。元日本赤十字社企画広報室参事。ボランティア育成、機関紙編集などを経て国際部開発協力課長としてアジア・太平洋・アフリカ諸国の開発援助、ソ連崩壊後の極東ロシアの人道支援事業の他、湾岸戦争時のクルド人救援、阪神大震災時の外国人安否調査などに従事。また学校教育の場での国際人道法の普及を促進。国際人道法の諸原則、人道思想及びグローバル世界と共生思想などの教育、研究を進める。主な著書に『戦争と救済の文明史』、『戦争のルール』、『医師・看護師の有事行動マニュアル』、『国際人道法の発展と諸原則』(訳書)など。

第1部

今を見つめる — Our World

第2部

新たな一歩に向けて — Your Move



RED CROSS SYMPOSIUM
2009



赤十字思想誕生150周年を迎えた今年、赤十字シンポジウム2009では、
 どんな時代でもなくてはならない「人道＝人を思いやる力」をテーマに、
 国内外で起きている非人道的な問題やその解決策について、様々な視点で議論を交わしました。
 「人道＝人を思いやる力」は世界を変えられるかもしれない。そんな期待を込めて、
 「人道って何?」「人道と人権の違いは?」「身近なことでできることってあるの?」などの
 素朴な疑問にお答えしながら、一人ひとりの命を大切に
 人が人らしく生きられる社会を実現するためには何が必要か、法律的な問題、国際社会の約束、地域や
 家族、友人とのキズナづくり、心のあり様などについて考え、一人ひとりのアクションにつなげます。

Our world. Your move.
 赤十字思想誕生150周年



赤十字国際委員会 (ICRC) 写真展



報告者：小川里美
 (赤十字国際委員会イラク派遣要員・京都第二赤十字病院看護師長)



報告者：石原浩毅
 (群馬県青年赤十字奉仕団)

第1部

**今を見つめる
— Our World**

オープニング

池 上: 本日のシンポジウムのコーディネーターを務めます池上彰と申します。今年には赤十字思想が誕生して150年です。「傷ついた兵士はもはや兵士ではない。1人の人間である。」というアンリー・デュナンの思いから始まった赤十字思想。赤十字では赤十字思想誕生150周年を記念して、今年世界各地で「Our World. Your Move.」というテーマで赤十字の過去・現在・未来を考えるイベントを行っています。このシンポジウム2009では人道、つまり人を思いやる力をテーマに国の内外で起きている非人道的な問題、あるいはその解決策について様々な視点で議論していきたいと考えています。まず、本日、みなさま方にお渡しした赤十字シンポジウムのパンフレットをご覧ください。

最初に出ている銃を持った少女の写真。少女はなぜこんな表情をしているのでしょうか。中を開きますと、家族の写真。なんとなく懐かしいイメージの写真でもあります。なぜこんな表情をしているのでしょうか。そして、タイトルにある「人を思いやる力」というのはどんな力なのでしょうか。そしてそもそも、赤十字思想ってなんなのでしょうか。こうした4つの疑問についてもみなさんと考えていきたいと思っています。その議論と謎解きをしてくださる4人のパネリストの方々です。まずは自己紹介を兼ねてどんな立場でこの謎解きに参加するのか、お話頂きます。まず日本赤十字秋田看護大学教授の井上忠男さんです。井上さんは日本赤十字社でアジア・アフリカ諸国の開発援助や、湾岸戦争の時のクルド人救援に従事した後、現在は国際人道法や国際関係の教育・研究をされています。

1. Our Worldと私 ~自己紹介

井 上: みなさんこんにちは。今、世界を毎日のニュース等で見ますと、昨年の秋からの世界金融危機、あるいは未だに2001年の同時多発テロ以降、世界には戦争が絶えないわけです。そしてまた、日本を見ましても、派遣切りとか、あるいは年越し派遣村とか、格差の問題とか、最近はまだ良い話題がありません。なんでこういう世界になってしまったんだろうかという素朴な思いが、ひとりの市民としてあるわけです。

こういう時代に生きるためには、私たちは何を考えていったらいいのか、どういう考え方を持ちながら、あるいはどういう具合に生きていったらいいんだろうかというようなことを、今日はみなさん方と一緒に考えてみたいと思います。今年には赤十字思想誕生150年の年であり、この年に、赤十字が150年ずっと引き継いで来たメッセージとは何だったのか、ということもちょっと突き詰めて考えてみたいと思います。

池 上: 続いて弁護士で国際人権NGOのヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表の土井香苗さんです。土井さんは大学在学中にボランティアでアフリカのエリトリアの法律、刑法の制定に携わりました。弁護士になった後は、難民の人権保護活動などを行っていらっしゃいます。現在は世界の国々の人権状況が良くなるようにと精力的に活動していらっしゃいます。

土 井: みなさんこんにちは。ヒューマン・ライツ・ウォッチの土井と申します。今日は1人1人のみなさんが世界の人々の人権のために、あるいは人道のために何が出来るのか、そしてより大きく日本の社会とか、日本の政府、外交とか、私たちが変えていけることは何なのかということ、

みなさんと一緒に考えていければと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。

池 上: 続いて東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授の姜尚中さんです。姜さんは、大学で学生たちの教育に携わる一方、気鋭の政治学者として、幅広い分野での著作や評論活動を続けていらっしゃいます。テレビでもコメンテーターとして活躍していらっしゃいます。お願い致します。

姜 : 今日僕は何を話そうか色々迷ったんですが、最近では、作家の高村薫さんとお話をした時に、彼女は阪神・淡路大震災の大変な状況の中で、自分も死ぬんじゃないかと思ったという話をされていて、彼女の言葉で、非常に印象深かったことは「人は虫けらみたいに死ぬけれども、虫けらみたいにはまた死なない」という。国境の内と外、世界の悲惨というのは外側だけではなくて、多分、質はちょっと違うと思いますが、自分の足元の中にもあるわけです。で、国境の外側と内側、世界と日本というか、それをまたいで人が死ぬというような極限状況にある事柄と、それからもうひとつは人間が生きるといふ、その両極端にあるものを多分、ジャン・アンリー・デュナンという人は、19世紀の半ばに自分の目で見て、そこから赤十字というものを立ち上げたんじゃないかと、勝手に思っているんです。そんな話をしたいと思います。

池 上: 続いてタレントの大沢あかねさんです。大沢さんはモデルとして活躍した後、現在はバラエティー番組など多くのテレビ番組に出演していらっしゃいます。今年出版した著書の中では、お母さんとの固い絆について書いていらっしゃいます。今日のテーマである「人への思いやり」あるいは「絆」について多いにお話頂きたいと思います。

大 沢: お願い致します。大沢あかねです。今、日本中や、世界中で非常に悲しいニュースが多いんですけれども、20代の代表という形で私なりに考えている事とか、思っている事を、勉強させていただきながら、何か考えをお話させていただけたらと思っています。宜しくお願いします。

池 上: 他の方からいろんな報告がこれからあります。その中で疑問に思ったこと、聞いたこと、どんどん聞いてください。

大 沢: 分かりました。

池 上: 本日のシンポジウムは2部に分けて議論して参ります。1部では私たちが生きる世界、あるいは日本の国内の今、「Our World」を見つめます。そして第2部では第1部の議論を踏まえて、私たちにどんなことができるのか、今度は「Your Move」について活動報告を聞きながら、みなさんと共に考えて参ります。では第1部を始めます。

『Our World. Our Challenges.』 (抜粋) 上映

2. 世界の今／日本の今

池 上：世界では東西冷戦が終わった後も、数多くの戦争、内戦、紛争が続いています。多数の難民が出ています。多くの問題を抱えている中、どうしても弱い立場の人が犠牲になります。パンフレットの写真にもありますように、様々な人権侵害も起こりやすくなります。そこでまず、最初に土井さんに、世界の国々の人権状況についてお話を伺います。土井さん、世界の国々の人権は、今、どうなっているのでしょうか。

土 井：はい。ありがとうございます。私どもヒューマン・ライツ・ウォッチが今モニターをしています人権状況は、実は世界80ヶ国にのぼります。みなさんも毎日ニュースを見て、ご覧になってお分かりの通り、世界中では、今池上さんが言われた通り、紛争が続いています。紛争の中で女性や子どもが亡くなる、罪のない民間人が亡くなるということはもとより、その紛争がない地域でも、例えば私たちのお隣、北朝鮮なんかその典型だと思いますが、人々が自由に物も言えない、理由もないのに強制収容所に入れられる。そういった人権蹂躪も続いているというのが、世界の現状であると思います。私たち、日本にいますと、とても平和な社会だなと思うこともあるかもしれませんが、でも、私たちの住んでいるこのアジアだけを見ましても、人権を奪われた人がたくさんいます。例えば、紛争で最近みなさんがよく聞くのがアフガニスタン。それから、ビルマ（ミャンマー）でも、内戦がずっと続いている状況です。もうひとつ、非常に大きな人道危機があった国にスリランカがありました。非常に小さい国で、特に日本のメディアでは取り上げられなかったんですが、インドの下にある小さな島です。今日は、このスリランカの写真（インターネット画像）を、お見せしながら、みなさんにご報告させていただきたいと思います。その後、去年の12月から1月にかけて3週間続いた、ガザでのイスラエル軍による攻撃、その2つの写真を例に取りながら、簡単にお話をさせていただきます。

今、スクリーンに出ておられますのが、スリランカの内戦の写真です。女性たちが多く傷付きました。また、内戦では多くの子どもたちが犠牲になりました。紛争の中でも民間人、子どもや女性などの非戦闘員は、攻撃の対象にしてはならないんですけども、実際はこのように多くの子どもたちが傷付きました。それから、これは、多くの民間人のタミル人という少数民族が戦争被災者になって沢山逃げてきた、そういう地域の写真です。この写真は食糧配給所に人が並んでいるところです。ここは、スリランカの政府が、「攻撃しない」と指定した「ノー・ファイヤー・ゾーン（戦闘禁止地域）」ですので、人々が沢山集まって来ています。しかし、今年の1月に、まさにこの場所に、2日間ほど政府軍が砲撃をしました。そして、この場所で数百人程の人が亡くなりました。これだけ沢山の人が集まっているということをご覧になれば、それも理解できるのではないかなと思います。また、この写真は実は病院の跡なんです。赤十字のマークをつけた旗がはためているような病院というのは、絶対に攻撃の対象にしてはならないと決まっていますが、実は沢山、このような病院も攻撃されたということ、ヒューマン・ライツ・ウォッチの調査は明らかにしました。スリランカでは、実は25年程内戦が続きました。政府軍と、ゲリラ（タミル人という少数民族の中の過激派が作ったゲリラ）が、25年の戦争を続けていたんですけども、実は今年に入ってから最後の戦争が行われまして、今年の1月から5月までにたくさんの民間人が亡くなりました。ヒューマン・ライツ・ウォッチのように、どのような人権侵害が起きたか、どんな民間人や

子どもたちが殺されたのかという調査をする団体が、戦闘地域に入ることをスリランカ政府は禁止しました。そしてメディアも入っては駄目と言いましたので、実際にはどれだけの人がどんなふう、誰によって殺されたのかがまだはっきりはしていません。けれども、国連の発表によると7000人ぐらいいは民間人が死んだと言っています。ちなみに、ヒューマン・ライツ・ウォッチは、政府に立ち入りを禁止されても、なんとか入っていきまして、色んな方法を行って写真も集めますし、情報も集めます。そうやって世の中にこの現状を問うわけなんです。一方で赤十字は、この戦闘地域の中に入ることが許された唯一の団体でした。他の人道団体ですとか、国連とかも、基本的に全てキックアウトされてしまったんです。それだけ赤十字というのが特別な団体だということが、このスリランカの内戦の状況からも分かると思います。今年の1月以降で、3人の赤十字スタッフがお亡くなりになったということも聞いています。この5月に、内戦は終わりました。政府がゲリラを完全に掃討して、戦争は終わったんですね。しかしながら、20万人以上の少数民族タミル人の戦争被災者が出ていたんですね。先ほど写真でご覧いただいた戦争被災者の人たちは、実は、戦争が終わって良かったねと、やっと戻れるね、とは実はならず、今も強制収容キャンプに入れられてしまっています。まだ今日現在でも25万人くらいの人々（全てタミル人の少数民族です）が、強制キャンプに入れられて、さく（二重のバルブで厳重に外界と収容所をさきぎっています）の外に出ることが許されていません。ですので、この写真のような形で、自分の家族ともバラバラになっている人たちがたくさんいます。こうやってワイヤー越しに話をするしかない状況になっているのが、スリランカの現状になっています。

池 上：土井さん、要するに内戦というには、いわゆる多数派がシンハラ人で、北部の方に少数派タミル人がいて、その少数派のタミル人の多くの人はずっと平和に暮らしているんですけど、その中の「タミルイーラム解放の虎」というゲリラ組織が、政府軍との武力闘争をやってきた。政府軍がその組織を壊滅させようとした結果、本当に一般のタミル人がこんな犠牲になったわけですね。

土 井：おっしゃる通りです。このゲリラ組織「タミルイーラム解放の虎」も多くの人権侵害を犯しました。この戦争は実は、政府もゲリラも両方が悪かったのです。「タミルイーラム解放の虎」はこの自分達と同じ民族であるタミル人—全く戦闘員ではない普通の人たち—を人間の楯に使ったんです。一方で、政府軍の方は、人間の楯であろうとなんであろうと、民間人がいる所には無差別な砲撃はしてはならないと決まっているにも関わらず、無差別砲撃をした。

池 上：そうですね。それが今年のとりのりわけ5月ぐらいいまで、大変な悲惨な状況だった。ところが、日本でほとんど報道されなかったんですね。

土 井：本当に残念でした。私の同僚のスイス人が、日本に来てビックリしていました、報道が全くされていなかった。逆に、全然スリランカと関係ない国スイスの方が、ずっと多くの報道がされていました。日本の方が、近いアジアだし、スリランカにもものすごくお金もあげている最大の援助国でもあり、政治的な関係も深いし、なぜここまで無関心なのかと言われてしまいました。私も言葉がなかったですね。もうひとつ、一応日本でも報道された戦争のこともひとつだけ簡単にお知らせしたいと思います。

これは2008年の12月の末から3週間あった、ガザ攻撃の際の写真です。イスラエル軍がガザに侵攻したのはみなさんもお存じだと思います。ガザのベイトラヒヤ地区にある国連の学校に、白リン弾という、焼夷弾の一種が降り注いで来た時の写真なんです。

池 上: これ斜め上左から右の方に、白い線がいっぱいあります。これが白リン弾なんです。

土 井: おっしゃる通りです。これで2人の男の子が亡くなって、14人がけがをされました。この白い線は、非常に広い地域に広がる白リン弾という爆弾の特徴です。特にガザは人口が密集していますので、多くの人々が市街地において、この白リン弾によって亡くなったという現状があります。国連のUNRWAという組織があります。UNRWAの倉庫に医療物資などがありましたが、白リン弾の爆撃を受けまして、3億5,000万円相当の医療物資が焼けてしまいました。最後の写真ですけれども、この子は、7歳のアヤちゃんです。1月10日、家において白リン弾が落ちてきて、手を折って、それから火傷もしました。同じ爆撃によってお母さんのハナンさんは、お亡くなりになったということなんです。

池 上: はい。この白リン弾は、たいへんな高熱を発生して物を燃やすわけですね。日本もかつて太平洋戦争中に、例えば、東京大空襲などで、焼夷弾というのがずいぶん落ちてきました。その現代版、最新兵器という感じですね。

大 沢: なんだかそれも悲しいですね。

土 井: そうですね。ただ視聴率があつてのテレビという実態もあります。市民達が、これが見たいな、あれが見たいなという声をどんどん広げていくといいと思います。

池 上: もちろん、メディアの責任って大変大きいんです。ただしその国の国民があつてこそそのメディアなんですよ。国民の意識がこういった点について高いと、メディアでもすぐ取り上げられる。ある種裏腹の関係にあるということも事実なんですよ。

大 沢: 私なんかもやっぱりこうやって見て初めて、ああこんなことになっているんだと、今初めて知ったので、もっともっとこういうニュースを流せばいいのって思ったんですけど、やっぱり普通にテレビを見てると、ああまた世界のどこかでは今日も何だかいろんな紛争が起きていたりしているんだっていう、どうしてもそういう考えになってしまつて。だから、やっぱり若い人たちがもっともっと関心を持たないといけないですよ。

池 上: 井上さん。井上さんはまさにこういう現場をいろいろ見てこられましたし、今は大学教授というお立場で、若い人にも接している。こういう現状を若い人たちにどう伝えていけばいいんでしょうね。

井 上: まさにそれが私の今の授業での大きなテーマです。今年立ち上げたのが、国際人道法教育センターという、これは文科省の助成金を得ながらやっている事業ですが、そのテーマはやっぱりこういう世界の現実を、今の若い人たち、とくに国際的な雰囲気に触れる機会が少ない秋田の

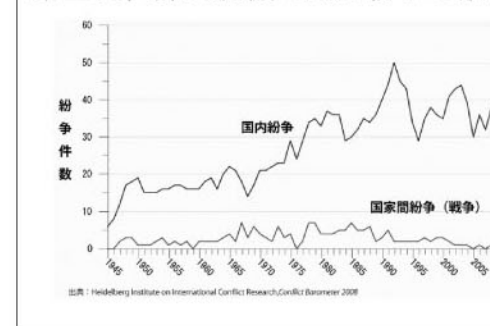
若い人たちに伝えていくということ、現実をまず知ってもらうということがものすごく重要です。今の若い人たちは、決して潜在的に無関心ではないと思っています。あるきっかけとか触発を受ければ、非常にいいセンスを持ってたりしますね。そういう機会に恵まれることが少ないだけであつて、私たちの世代と基本的に同じかもしれません。僕達の世代は全学連闘争の終わりの頃でしたけれども、その当時の学生が持っていた感性が今の若者には眠っているだけです。だから、とにかくそういう触発するような機会、教育、知ってもらう機会を飽きずに、倦むことなく続けるということが必要だろうと思います。

池 上: それから井上さん。土井さんの報告にもありました。こういう紛争があると、常に紛争、戦争があると結局、民間の人たちがたいへんな犠牲になるんですよ。

井 上: そうなんです。ちょっと、チャートをご覧頂きたいと思うんですが(資料.1)。世界の紛争の状況をここで見ていただきたいです。第2次世界大戦が1945年に終わりました。私たち日本人は戦後一貫して60年、戦争がないわけですね。そうするとこれほど平和な時代はないと思うんですが、ただ世界をちょっと俯瞰してみますと、こういう現状になっています。下の方の、多少でこぼこはありますが、だいたいほぼ一定しているのが、国と国の戦争、国際戦争の起きている件数です。これはだいたい一定しているんです。右肩上がりで多少でこぼこはありますが、こう伸びているのが内戦。今、土井さんの報告にもありましたスリランカも含まれる内戦です。こういったものは、どんどん増えてきている。これは独立運動が民族自決の基に、戦後国連の中で自決権というのが非常に大きな権利として認められて、戦後インドシナの独立闘争ですとか、インドの独立、アフリカ諸国の独立など、戦後から50年代60年代にかけてちょっと増えてますね。それから、突出してのびているのが、ご覧になって分かると思うんですが、90年代です。これは89年にドイツのベルリンの壁が崩壊し、91年の12月にソビエト連邦が崩壊した。その後、旧ソ連のグルジア、チェチェンなどの問題もありました。その独立絡みの戦争ですね。内戦と国際戦争、双方の要素を持っていますけれど、こういうものが増えてきたということで突出しています。みなさんご記憶にあるのが91年の湾岸戦争ですね、戦争はこういう形で増えてきています。

それから次のチャートをお願いします(資料.2)。これがそういう戦争の中で犠牲になった人たちの推移ですが、今、土井さんの報告にもありましたように、いわゆる戦争というのは、伝統的には兵隊が戦うもので、民間人が犠牲になることは本来はなかった。歴史的にはですね。唯一の例外があるといわれているのが400年前のヨーロッパであつたいわゆる三十年戦争という宗教戦争です。1648年に終わった戦争ですけれども、この戦争は唯一、戦闘員より

第二次世界大戦後の武力紛争の推移



資料.1

戦闘員と民間人の犠牲者(死者)の推移

	戦闘員	民間人
第一次大戦	95%	5%
第二次大戦	52%	48%
朝鮮戦争	15%	85%
ベトナム戦争	5%	95%
核戦争(予測)	1%	99%

資料.2

民間人の犠牲者が多かったといわれています。それ以降もう戦争というのは、基本的に兵隊が死ぬ戦争だったんです。第1次世界大戦もそうですね。ところが、第2次世界大戦では、戦闘員と民間人の死者が半々くらいになってきた。それ以降の戦争を見ても、もう圧倒的に民間人が多いということです。仮に核戦争があれば、これは、広島や長崎の教訓から得ているデータですが、死ぬのはもう圧倒的に民間人だと。そして先ほど、土井さんの報告にもあったスリランカの状況も、こういう状況に近いと思います。例えば、具体的にいいますと1994年4月から7月くらいにありました、ルワンダの内戦というのがありますが、内輪に見積もって80万、多くて100万人がこの数カ月で亡くなっています。ホテルルワンダという大ヒットした映画にも描かれています、この80万から100万の犠牲者、大半が民間人であるということと、殺し合っているのが兵隊とは限らない。民兵や民間人も巻き込んだの斧や鉞と言った武器を持っての内戦で非常に悲惨でした。次お願いします（資料. 3、4）。これはダルフル紛争の写真ですね。



資料.3



資料.4

池 上：そうですね。スーダンの政府、チャドとの国境付近の写真ですね。ダルフルですね。

井 上：現在の武力紛争というのは先ほど申しましたように、日本にいと平和な社会とありますが、世界では常時、多分40ヶ所前後で、戦争が常に行われている。そこで亡くなる人の9割は民間人であるということと、内戦が全体の戦争の9割を占めている。こういう時代はいまだに進行しているということです。これはもうみなさん日常的なテレビや新聞の報道でご覧になっている通りだということです。

池 上：はい。かつて戦争の古典的なイメージですと、戦場で兵士同士の殺し合いでした。今、どこが戦場だか分からないくらい、普通に民間の人たちが住んでいる場所が戦場になり、普通の民間人が犠牲になる、それが現代の戦争なんだということです。という、世界の今を見てきました。では続いて日本の今を考えます。

『VTRイメージ映像（秋葉原通り魔事件、パチンコ店放火事件、年越し派遣村）』上映

3. 日本の今

池 上：姜さん、映像見ますと、日本はどうなっているんだろう、どうなってしまうのだろうって気になりますね。

姜：そういう人が何人か増えていますよね。こういう状況っていうのが、どうして生まれているのか。つまり、外側の悲惨さにできるだけ関心を持ちたいんですけども、自分自身のことで精一杯というよりは、なんか自分が見捨てられているんじゃないかと思う人が多くて、これは我々の世代でいうと、井上陽水の「傘がない」ってありますよね。世界は悲惨だと色々人は言っているけど、自分には今日傘がないと。これは自分にとって一番大切なことだと。これはもちろんアイロニカルに言っているんですけども、世界が悲惨であっても、自分もまた違った意味で尊厳が傷つけられている。そういう人たちが確実に増えていることは間違いないと思う。それが人を殺すことに向かうのか、自分を殺すことに向かうのか。そのベクトルはかなり違うかもしれないけれども、かなり共通したものがあんじゃないのかなとみえますね。

池 上：捕まってから、誰でも良かった、自分を死刑にしてくれ、という。

姜：そういう人が何人か増えていますよね。こういう状況っていうのが、どうして生まれているのか。つまり、外側の悲惨さにできるだけ関心を持ちたいんですけども、自分自身のことで精一杯というよりは、なんか自分が見捨てられているんじゃないかと思う人が多くて、これは我々の世代でいうと、井上陽水の「傘がない」ってありますよね。世界は悲惨だと色々人は言っているけど、自分には今日傘がないと。これは自分にとって一番大切なことだと。これはもちろんアイロニカルに言っているんですけども、世界が悲惨であっても、自分もまた違った意味で尊厳が傷つけられている。そういう人たちが確実に増えていることは間違いないと思う。それが人を殺すことに向かうのか、自分を殺すことに向かうのか。そのベクトルはかなり違うかもしれないけれども、かなり共通したものがあんじゃないのかなとみえますね。

池 上：井上さん。今の姜さんのお話、人を殺すか、自分を殺すかという悲惨な状態。世界の中での日本を見るとどんな様子なんですか。

井 上：私は秋葉原事件をニュースで見た時に咄嗟に思ったのが、イラクやアフガンによる自爆テロなんです。自爆テロと秋葉原事件。これは必ずしも同質に語ることはできないんですが、一面では心理的な類似性があるんじゃないかと思ったんです。日本で、今の社会の中でおとしめられてしまった人たちが、最後の手段として自殺的な巻き添え死を企てて、社会を道づれとして自殺していくという感じです。いわゆる自爆テロの人たちがやっていることも、相手は誰でもいいわけです。民間人をターゲットにして。そしてそれはやっぱり、ああいう人たち、必ずしも正当な論理ではないと僕は思いますけれども、このグローバル時代を迎えた社会の中で、ひょっとしたら、貶められている人たち、そういう民族や集団というものがあんじゃないかと。いわゆる市場原理主義が席捲する社会の中で、それにうまく乗れないし、その恩恵も受けられない人々は、逆に、どんどんそういうグローバル化の中で貶められていく。そういう人たちの最期の悲痛な叫びとしての自爆テロ。正当化するわけじゃないんですけど、そういう構

造もあるのではないかなと。そうすると日本と世界と、全く別の世界のようだけれども、何か今の地球の社会、今日は「Our World.」というテーマですけれども、地球世界の個人、人々を眺めていくような、ちょっと表現しにくいですが、そういう閉塞感というか、そういうものが漠然と私たちの世界を覆っているような気がしてしまうんですね。

池 上：中東ではイラクでの自爆テロ犯を募集するインターネットのサイトがあるほどです。そうすると非常に閉塞的な町で暮らしていて、生きる目的が分からない若者たちがそれを見て、死に場所を見つけて、自爆に参加する、そういう動きもあるんだという話を聞いたことがあります。

井 上：結局、そういうことがもし事実だとしたら、良い悪いは別としてそれは今のグローバリゼーション、あるいはグローバル化世界の中で、そこにうまく乗り切れないで、むしろ負の要素ばかり背負っている人たちの世界や社会に対する復讐を込めた最後の叫びと見ることもできるかもしれない。決して僕はそれを正当化するつもりはないですけども、少なくともそういう弱者の側の叫び、パレスチナの問題もそうだと思いますが、そういう叫びはあると思います。それは秋葉原事件の彼が、最終的に辿った隣人を殺しながら自分も死にたい、ということと、非常に共通したものを僕は感じるんですけどね。

池 上：土井さんいかがですか。

土 井：今、井上先生がおっしゃったことと同感ですね。スリランカの内戦にせよ、先生がおっしゃったようにパレスチナで起こっていることも、日本でも、やはり自分が不当に扱われていると、弱者であると、その正義が欲しいという怒りが爆発したという側面があると思います。不正義は、人々を立ち上がらせる。本当は、合法的な手段を用いて言論で闘うとか、あるいは私みたいに法律を使ってたたかうとか、やり方はいろいろあるんですが、場合によっては力を、武力を使う人もあらわれる。それは秋葉原の場合にも、ある意味社会に対して闘ったような側面もあるのかなと感じたりいたします。ただ、手段はいろいろあるわけで、やはり本来は武力を使うべきではない。私が思うには、社会に不正義があると感じたならば、では、正義を実現するにはどうしたらいいのか、社会のどこに問題があるのか、あるいは国際政治の中で何が問題であるのかということ考えた上で、それを改善しようと行動を起こしていくべきだと感じます。みんなのために物事を改善しようと思うと、突然本当に世界が広がります。私がやっている活動なんかその一種なのかなと思います。実は人のために活動すると、すごく渴きが癒されるというか、逆にすごく、リワーディングといいますか、とても充実した活動にもなるような気がするんです。ですので、不正義を改善しようとみんなのために行動できるか。怒りをぶつけるか。その転換点があるのとならないのと全然違うなど。自分も高校生の時とかはこう見えても内向きで、いろいろとウジウジ考えて、死にたいなと思ったりしたこともありました。人には、他人のためにそんな活動していて何がいいのと言われますが、確かに他人のための活動だけれど、それが精神的には自分のためにもなるすごく充実した活動のような気もいたします。

池 上：大沢さん、今お二人からね、つまり世界の問題と日本の問題ってものすごくかけ離れているかのように見えるけど、なんか共通したところがあるというお話がありました。その話を聞いてどうでした？

大 沢：そうですね。日本のこういうニュースを聞いていて、自分は被害者になりたくないというか、うーん、世界とはかなり規模が違いますけど、自分が被害者じゃなきゃいいやと、どこかでやっぱり思っているところがあるんですよ。

池 上：あ、そうなんですか。つまり、ああいうのが起きると、悲惨だな、嫌だなと感じる。でもどこかで、自分じゃなくて良かった。自分の家族じゃなくてよかったって思いがどこかにある？

大 沢：そうですね。昔、電車の中で、男性の老人の方に若い男性が暴力を振るっていたんですよ。何が原因なのか分からないですけど。それを電車の中で誰も止めようとしなかったんですよ。それを止められない自分もいて、やっぱりみんな被害者になりたくない。関わったら恐いとか。いじめとかもそうだと思うんですよ。いじめられてるけど、それを止めちゃうと自分もいじめられちゃうとか。今の日本人ってきっと、特に若者はそういう「見て見ぬふり」というか、そういうことが私も少なからずあったりするので、そういうこともあるのではないかなと思います。

池 上：なるほどね。「見て見ぬふり」が、それがやがて国内だけじゃなくて、世界に対して見て見ぬふりをしている部分もあったりしますね。

4. なぜ、紛争や人道問題が起きるのか？

池 上：姜さん。こういう「見て見ぬふり」をするという社会状況、どう分析されますか。

姜 ：そうですね、僕はあんまり上から目線で言えないんですが、ひとつは、やっぱりジャスティスというか、正義ということについて、これはどんな正義なのか、単に抽象的に正義というだけではなくて、どんな意味で正義なのか考えてしまう。やはり正義を愛するということが、人間の中に本来あるんじゃないかと思うんですね。友愛なんていうとどこかの政党のトップの方の話をするようで恐縮なんですけど、フランス革命でも、フラタニテという友愛、博愛ですよ。

池 上：自由・平等・そして友愛、ないしは博愛ですよ。

姜 ：ですから、赤十字の基本にはそこがあると思うんです。人を裁くということにおいては、我々は非常に一生懸命になるんですけども、それを包み込むということはできないですよ。口でこう言ってもやっぱり憎しみの方が人間をかきたてるし。だから新約聖書のローマ章の中に「汝復讐することなかれ 復讐するは我にあり」とある。やっぱりこれは、中世社会でも人が人を殺しあうことを止めるために、全てを神に預けると。国家というのはある種の大前提として絶対に仇討ちを許さないという形で、国家が最終的には全部を武装解除させて暴力を独占して、場合によっては死刑ということを決めてしまったんでしょうけど。人間の憎しみとか、そういう感情というのは、これがやはり内戦を駆動していく。場合によってはそれに対して悪だという形で、ブッシュ大統領がこちら側につくか、あちら側につくかというサイドの思想で悪か正

義かという。それは結局裁きにしかならないので、今はその国家間で戦う時には相手を殺すけれども、それなりに相手を尊重してるわけです。しかし、今起きてることはある種の害虫駆除で、つまり、ほとんど生きるに値しない人間たち、これを我々はテロリストと言っているわけですよ。

昔はそれを法規じゃなくて、要するにそれこそテロリストに近い形でやっていて、色々言われていた時代もありました。これを日本の日中戦争と同一化してはいけませんが、やっぱり人間として認めてない。人間として認めてないから、テロリストの容疑のある人を、一切の国際法を抜きにしてキューバのグアンタナモで、ああいうこともできる。だからそういうふうに見られている人間たちが、私たちの身近にもいるということですね。私たちはそう見てなくても、本人はそう思ってる。そういう人たちがいわばある種の自爆的な行動に出るといえる。だからむしろ、冷戦下の方が幸せな人もいるのではないかと思うわけです。僕はそう思わないけど。今必要なのは、このフラタニテ、友愛というものを、僕は民主主義者ではありませんが、友愛というものをいかにして実感できるか。写真を見ても、悲惨だと思ふんですけど、長続きしないのはどうしてなんだろうと。

この間、セバスチャン・サルガドという人と対談をして、彼の写真も見てきました。なぜその写真をずっと見ていたかということ、尊厳が表れているわけです。ディグニティ、尊厳がどんなに悲惨な中でも表れている。だから上から目線ではないんですね。やっぱりそれは憐憫とは違う。世界で起きている色々な出来事を、ただ悲惨だ、アフリカでは飢餓がある、ダルフルではこういうことがあるというだけでは、人が内側からそれに対して手を差し伸べようとする、内的な駆動力が湧いてこないんですね。その時はショックかもしれない。でも、それを持続させるためには、何かもうひとつ違うものがなくて、それは何なのかというのは、よく分からないんですけど、サルガドさんはそれを英語でいうとインスティンクト、本能だと。本能というよりは僕は人間の本性。人間の本性に訴えかけるような何かを作らない限り、場当たりにその場でショックを与えられても、それに手を差し伸べて自分が動こうというふうにはならない。そこに難しさがあると思うんですね。何かもうちょっと違う何かを作らない限り、世界は悲惨なものもあるというだけで、結局はスポッ的にそこで終わってしまう。やっぱり井上陽水が言うように今日は傘が大切だということになってしまふんじゃないかな。必要なものは何だと言われても、僕はまだよく分からないんですけど。

池 上: 土井さん。何だと思いますか。

土 井: 何だというのは、先生が今本能とおっしゃったものが、本当にそうだなというふうには私 생각합니다。自分がヒューマン・ライツ・ウォッチのような活動をしているのも本能的なものでし、多分みなさんがこのシンポジウムにいらっしゃっているのも、ある意味本能。それはいいことじゃないかな、人間誰でもよい本能があると思っていますけど、ただ姜さんおっしゃる通り、長続きはしない。ただ私は実は長続きはさせる必要はないと思っています。私みたいに人権保護を職業としている人、井上先生みたいに人道的保護を職業としている人は、これはもちろん長続きしなくちゃいけません。でも、仕事でもない限りは、長続きしなくてもテレビを見た瞬間、これはひどいと思うレベルでいいのかなと思うんですよ。その後で、例えば自分のブログにちょこちょこっと書くとかですね、隣の人にしゃべるとか、あるいは、何百円でも、人の財力によってですけども、募金するでもいいですし、簡単なことをやればいいだけであり、実は決してスポッ的なことで悪いとは思わないですね。でも、私が思うには、日本のより大

きな問題は、一般の人はスポッ的には感じているが、例えば、政府の人ですとか、政治家ですとか、本当は仕事でグローバルな人権・人道問題についてもっと真剣に考えて行動しなくちゃいけない人、もっとプロとしてやるべき人が、実はよく考えてないことの方が大きな問題だと思っています。

池 上: 年越し派遣村というのがありました。あれが起きる前に、そういうことを、助けることを仕事にしているプロたちが、本当は動くべきだったわけですよ。

土 井: はい、そうですね。あれは国民がテレビで見て、新聞で読んだ。やっぱりこれはいけないじゃん、とスポッ的な思いをもった。必ずしも派遣村に行かなかった人も大勢いるとは思いますが、その気持ちが、政権や政府をやっと動かしたというところがあると思います。ですから、みなさんのスポッ的な思いが少しでもたくさん生かされることを、政策決定する人たちに、より真剣に行動をしてもらいたいです。

5. アンリー・デュナンの見た世界と赤十字思想の誕生

池 上: 井上さんね、今おふたりのお話にもありました、とにかくなんとかしたいという人間の本能はある、本性はある。だけど長続きしない。その時にそれを長続きをさせる組織を作った、その仕組みを作った人が、150年前にいたわけですね。

井 上: そうですね。土井さんが今、僕は教師として長続きしているとおっしゃいましたが、僕も続きません。だから、折々に自分をまた刺激しなくちゃいけないんでしょうね。話を戻しますが、姜さんが先ほど人間の本性とおっしゃったこと、非常に私も共感していて、実は、アンリー・デュナンに多分非常に影響を与えただろうと思うジャン・ジャック・ルソーは、「憐れみの心は人間の本性」だと言ってるんですね。この憐れみの心というのは人道主義のルーツだろうと思うんですね。これは啓蒙思想の影響を受けていますが、恐らく人権と人道の違いは何かって言ったら、人権というのは18世紀頃から、啓蒙思想の中で培われてきた人間の権利に根ざしているようです。難しい言葉でいうと自然法がベースになっているんでしょうけれども。つまり人間の権利に目覚め、獲得された権利ですね。一方、人道は自由・平等・友愛。いわゆるリベルタ（自由）・エガリテ（平等）、それからフラタニテ（友愛）という、さっき姜先生がおっしゃいましたが、その中のフラタニテという友愛がベースになってきたんだろうと思うんです。なんで赤十字が150年続いたかという、それがアンリー・デュナンの大きな功績のひとつですが、人間の本性としての友愛とか博愛という気持ちを形にした。ただ、赤十字と個人の善意とか哀れみは全然違う。その違いは何かっていうと、デュナンはそれをシステム化し、その愛を技術に高めたんだと思うんですね。これは何かというと、「The Art of Loving」、日本語だと「愛するということ」という意味だと思うのですが、その本を書いている私の好きなエーリッヒ・フロムが、「愛は技術」であると言ってるんですね。その個人の善意と赤十字の大きな違いはこうです。例えば愛がある人がいたとします。ところが路上で人が倒れていたとしますよね。そしたらそれを救うにはどうしたらいいのか。救急法の技術がなければ救えないわけですね。だから愛を実行するには必ず技術が伴うっていう具合にエーリッヒ・フロムは言っているわけです。同じことが言えて、私たちは

愛があれば全ていいことができるというのは錯覚で、愛を現実に実践するためには具体的な技術がなければいけない。それから後、ネットワークですね。システム。これが必要だと思うんですよ。赤十字というのは、アンリー・デュナンの提唱で愛の技術化とシステム化を成しとげたのだと思う。それが個人の善意と、善意をシステム化し技術化し、技術にまで高めた人道機関の違いなのだと私は思います。

池 上: そのシステムを作ったからこそ、それがスイスに留まらず、世界中に広がって、150年経って、これだけ大きな組織、運動になってきたってことですね。

井 上: そういう風に思うんです。ただそのシステムが、人間の本性に由来していなければ、やっぱり共感を得られないので、その所では全人類が共感しあう。では具体的に次の第一歩をどう歩もうかという時に、技術がなくてできる人道活動もありますけれども、やっぱり専門、プロフェSSIONナルとしてやっていくためにはそれをシステム化し、ネットワーク化し、それから技術、ノウハウを身につけないと、具体的に人を救えないし、救援もできない。そこがやはり個人のレベルで収まっている善意とか愛とかと、人道機関が違う所なのではないかと思います。

池 上: なるほどね。大沢さん。「愛は技術」なんだそうです。つまり大沢さんも電車の中で、それこそお年寄りをいじめている人がいて、みんな嫌だなど思ってる。なんとかしたい。嫌だなんて思っているのは、いわば人間の本性。そういう愛はみんなあるわけですよね。それから先になかなかいけなかったというお話でした。

大 沢: そこは技術なんじゃないかな。でも、そんな技術を持っている人はきっと少ないかもしれないですね。残念なことに。

池 上: 自分でそういう技術を考え出すっていうのはたいへん難しいですよね。どこかで、こうやればいいんだよっていう様々なヒントを見ることによって、私たちは色々なことを、知ることが出来ると思うんです。土井さん、まさに土井さんはそれをおやりになってらっしゃるわけですよね。なんですか、その技術っていうのは。

土 井: そうですね。確かに私も大沢さんみたいな場にいたら声をあげられるのかというと、確かにピア・プレッシャーはあると思います。みんなが言ってないのにあなたはやるか?っていう。そこは本当に難しい。それで自分を許してしまっているのかどうか分かりませんが、ただ人権や人道のため、活動するために、あなたは聖人じゃなきゃいけない、というのはちょっとつらいので、そこまで気負わなくてもいいのかなど思っているのです。ただやはり、大きな不正、不正義みたいなものがあつたら、「やっぱり声をあげるべきだ」「自分は不正義に屈したりはしないぞ」って、思っていることは、大事だと思います。本当は日本の社会で、そういう気持ちをもっともっと奨励していくべきではないかなと思います。日本人だけじゃないかもしれませんが、もっともっと声をあげて、さっき姜さんが上から目線とおっしゃったんですが、まさに下から目線になるようになるべきだと思います。要するに、被害を受けている人たち、あるいは、理不尽な目に遭っている人たちのために、一緒に闘うぞというような正義感が、もう少し日本の中であるといいなと思います。日本人は、みんな基本的にはとても思いやりのある人たちだと

思うけど、ちょっと静かなんですね。沈黙する国民性が若干残念だと思います。

池 上: 分かりました。それがまさに、今の世界と日本の「Our World」だということが大分見えてきました。じゃ、どうすればいいのとみんな思っているはずなんですよ。つまり、どうすればいいのか、それが「Your Move」。それをこの後、第二部で考えたいと思っています。ここで10分の休憩をいただきます。休憩時間中にロビーで質問票を受け付けています。本日のテーマに関する質問、あるいはこのパネリストにこれを聞きたいというのがあつたら、ぜひ質問を書いてください。後ほど私がみなさんに代わって、パネリストの方に質問致します。

第2部

新たな一歩に向けて

—Your Move

6. 世界で行われている、問題解決に向けた多様な取り組み

池上: それでは赤十字シンポジウム2009第2部を始めます。第1部ではキズナがすっかり傷んでしまった世界、そして日本の今を見てきました。これからの第二部では、人と人とのキズナを再生し、人が人らしく生きられる世界を実現するには、何が必要なかを考えます。そこで世界と日本で実際に活動しているお二人の方にも報告を頂きまして、私たちに何が出来るか「Your Move」について考えていきたいと思います。

世界では紛争の犠牲者に対する様々な医療援助、飢餓に対する食料援助、NGOあるいは赤十字、そして国連が様々な援助活動をしています。そうした取り組みのひとつ、赤十字によるイラクでの取り組みを報告頂きます。報告していただきますのは、現在もイラクで活動していらっしゃいます、京都第二赤十字病院看護師長、小川里美さんです。小川さんはスーダンの紛争地、ダルフルでも活動したことがあるベテランの看護師さんです。小川さんは、このシンポジウムのためにイラクから駆けつけてくださいました。

小川: ただいまご紹介にあずかりました小川です。本日は貴重な機会を頂きましてありがとうございます。それでは早速ですが、赤十字国際委員会の活動、特に医療活動についてご報告をさせていただきます。赤十字では、戦争や紛争の犠牲者に対する支援を各国の赤十字社とともに展開しています。その支援のひとつに、医療活動というのがあります。紛争地域での主な医療活動というのは、次の3つです。スライドをご覧ください(資料、5)。

まず、一つ目は戦傷外科病院における医療活動です。これは紛争地域で負傷者を救援するために医療施設がない、そういうところでの、あるいは赤十字で病院を作って患者さんを収容しないといけないという場合に、病院を建てて、患者さんの救護にあたります。現在ではパキスタンにあるベシャワールの外科病院がこれにあたります。現在も日赤から看護師1名、そしてレントゲン技師1名が派遣されて活動を行っています。

二番目は、既存の病院の支援というのがあります。これは、既にある病院に医師や看護師を派遣して、現地の医師や看護師の教育、あるいは医療物資を送って救援活動を行うものです。アフガニスタンにあるカンダハールの病院がこれにあたります。現在日赤からは3名の看護師が派遣されて、ここで活動を行っています。

三番目は、緊急外科チームの派遣というのがあります。これは紛争地域で、医療施設も全くない、あるいは安全性からも救援活動をするのが難しい、そういった場合に最小限の人数、4人くらいで構成された医療チームを現場に派遣をして救援活動を行います。この写真が、かつて200万人の犠牲者を出した世界最大の人道危機といわれた、ダルフルでの活動の様子です(資料、6、7)。

それでは次に、イラクでの現在の活動を紹介します。これがイラクの、私の今いるスルマニヤの風景です(資料、8)。イラクでは赤十字でも初めての試みである救急医療の支援という、現地の医師や看護師への研修を行っています。現在イラクでは、自爆テロ、爆破事件、そして交通事故などによって、月平均1,000

赤十字国際委員会の主な医療活動

1. 戦傷外科病院の運営
2. 既存の病院の支援
3. 緊急外科チームの派遣

資料.5

人以上の死傷者を出しています。それでも実際には救急の対応がきちんとできない状態にあります。そこに赤十字から多くの医師や看護師を派遣して救援活動ができるかということ、それだけの安全保障はありません。そこでイラクの保健省と話し合いをして、赤十字から現地の医師たちを教育できる、救急医療の対応を出来る研修をしてくれないかということになりました。現在北部クルド人地区のスルマニヤと、そして南部のナジャフという2か所を拠点にして、向こう2年間継続して研修を行うコースを始めました。私のいるスルマニヤではこれまでに医師が百数名、そして看護師は80名、研修を終えております。これがスルマニヤの病院の風景(資料、9)なんですけれども、本当にものが何もない。救急で患者さんが運ばれてきても、処置ができないといった状況です。ただこのコースを終えた看護師や医師たちの反応というのは、非常に良く、ぜひともこのコースをイラク全土の病院に普及させて欲しい、多くの医師や看護師に参加してほしいという感想をいただいています。イラクでは長年の紛争による状態で、医師や看護師たちが技術だとか知識を磨く機会というのが全くありませんでした。なので、研修では彼等たちの学びが、まるで乾いた土が水を吸い込んでいくように、知識を吸収していくというのを実感しています。私たち医療を担う人間というのは、免許をもらったらそれで良いというのではありません。より良い医療や看護が提供できるように、常に経験と学習を積み重ねながら、そしてそれを自分で磨いて、切磋琢磨して、患者さんに還元していく。そういった義務があります。研修では、イラクの現状で、沢山制約を受けた中でどうやって、彼等たちが自分達の病院の状態を改善していけるのか、それをどうやって患者さんの利益に繋げていくのか、自分達の病院での計画というものも話し合ってもらっています。イラクでは実は医師や看護師たちが、一緒に議論することが許されない文化的な背景があります。でも、この研修では医療というのはチームですということを強調をして、医師や看護師たちに議論してもらっています。実際、彼等の本当にいきいきと自分達の意見を述べて、ちゃんと病院の計画を出している姿を見ると、とても胸が熱くなります。



資料.6



資料.7



資料.8



資料.9

ここに映っているのが実際の研修現場です（資料 10、11）。医師と看護師一緒に救急の初期対応の、研修（資料12、13）もやっております。

それでは最後に、イラクで働くある看護師の言葉をご紹介させていただきます。本当は英語ですけれども、日本語に訳すとどうしてこんなになってしまうのかなと思いますが、彼の発言は、まさに本日のテーマに関連していて、私たちが何をすべきなのかなということを考えさせられると思います。ある看護師の言葉です。

「長年の戦争でこの病院は本当にひどい状態だ。壁や床は朽ち果て、どこもかしこも腐ってしまっている。誰もこんなひどい所で働きたいとは思わないだろう。給料だって満身に支払われていない。政府や病院の責任者からも忘れられた場所だと思われぬ。」そこでたずねました。でもあなたたちはこうやって毎日病院に来て働いているじゃないですか、と。そうすると看護師はこう答えました。「私たちはここにいて患者さんたちを見捨てるわけにはいかないんです。私たちがケアをしなれば、誰がケアをするんでしょうか。病院がどんなひどい状態であっても、ここしか医療施設がない。頼る所がここしかない人たちは私たちが見捨てることはできないんです。こういう人のために私たちは働かないといけません。」

看護師として患者さんのケアをするのは当然です。でも20年以上もずっと政府から見放され、そして給料も払われない状況に自分が置かれたら、果たして私は同じことが言えるのか、とても自信がありません。恐らく逃げ出すと思います。自分の生活を守ることが第一になると思うんです。現にイラクでは多くの看護師が病院を去りました。でも決してこの人たちを非難することはできないんです。イラクで起こっていることは1ヶ月とか、1年だとかそういうことではなくて、20年以上も政治的にも、経済的にも、本当に厳しい状態に置かれた中で、それでも人のために働くと、そういうことが言えるこの看護師の言葉と行動に、私は医療とか看護を越え



資料.10



資料.11



資料.12



資料.13

た人としての在り方というものを、改めて考えさせられ、学ばされました。彼の行動っていうのが、まさに人道そのものではないかなと思います。困難な状況の中でも、決して苦しむことを見捨てないで働く人がいます。彼等の強さに感動するだけでなく、自分で出来ることは何か、彼等を支える方法はないだろうか、そして、彼等の人への思いやりや行動を繋げていく必要があると思います。人を支えていくこと、それも赤十字の大切な役割だと思っています。以上で報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

池 上: 小川さん、ちょっと質問があります。小川さんの活動していらっしゃる写真が出ましたが、何語で会話をしているんですか。

小 川: イラクでは私は英語を使います。通訳が付いてくれますが、患者さんとか話す時はできるだけイラクの言葉を覚えて単語で会話をします。

池 上: イラクはだいたいアラビア語ですが、北部の小川さんがいらっしゃる辺りは、クルド語ですよ。なのでクルド語でやってるんですか。

小 川: 私自身は英語で話しますが、通訳についてくれる彼がクルド語に訳して研修をやりませう。

池 上: なるほど。赤十字というと、とにかく現場に行き、困っている病気の人たち、けがをした人たちを助けようと活動するのですが、イラクに関してはイラクにお医者さんや看護師さんたちがいるんだから、その人たちを育てていくという活動が主だということなんですね。

小 川: はい。そうですね。そこに居る人たちを育てる。私は思うんですけど、救援の形って色々あると思うんです。例えば、病院を建てることももちろん大事なんです。だけど、一番残っていくのは、おそらく教育だと思っているんです。人を育てること。それはずっと繋がっていくし、広がっていくものだと思います。

池 上: 大沢さん。報告を聞いて何か感じましたか。

大 沢: 女性で現地へ行かれて、怖い環境の中でそうやって活動していらっしゃる小川さんたちの努力というのは、やはり日本人にとっての誇りだなど、今、報告を聞いていて思いましたし、その現地の方が、給料も満足にもらえてないのに、でも人を助けるために働こうというのがまさに、人と人が助け合う絆なのかなって思いましたね。

池 上: 怖い思いをしてないんだろうかって聞きにくいけど、多分みなさん思ってると思います、どうですか。

小 川: イラクの、私がいるスルマニアですね、クルド人地区というのは比較的 безопасなので、そういうことはないです。ただ、紛争地域で色々な所に行きましたけれど、そういう所では時には、ん？と思うようなこともなかったことはありません。

大 沢：患者さんはちいさい子どもたちも結構いるんですか。

小 川：はい。先ほど土井さんの報告にあったんですけれども、本当に無差別です。マーケットやイスラムの国ですので金曜日になるとお昼のプレイヤーとって、イスラムの祈りがあるんですが、そこに人が集まったときを狙って攻撃しています。

池 上：金曜日の集団礼拝でね。集団でみんなが集まって来た所が狙われるということですよ。

大 沢：もう言葉も出ないですね。

池 上：まさに言葉も出ないんですが、こういう現場で活動している女性たちはそういうことを、明るくあっけらかんと語ってしまうんですね。私も大勢見てきましたけど、みんな信じられないような居住環境の中で、「危険なことがないわけではないですけど」みたいなことを言ってしまう。ありがとうございました。また、イラクにお戻りになるんですね。お気をつけて。

小 川：はい。ありがとうございました。

池 上：今のような赤十字の取り組みがありました。でも、赤十字だけじゃないですね。様々なNGOが活動しています。今度は人権侵害に対して取り組むNGOの活動について土井さんをお願いします。

土 井：ありがとうございます。今の活動は赤十字という人道団体の王様みたいな団体から報告がありました。もうひとつ、目的は人道団体と似ているんですけれども、人権団体というものがあり、やり方が違うということもあります。そこで、私の団体、ヒューマン・ライツ・ウォッチを例にとってお知らせしたいと思います。みなさんも、人権団体といいますと、アムネスティ・インターナショナルという、ロンドンに本部がある団体をご存知なのではないでしょうか。そちらが実は世界で一番大きな人権団体になっています。私どもヒューマン・ライツ・ウォッチは、ニューヨークが本部ですが、これが世界で2番目に大きな団体です。

国際人権団体が、先ほどの人道団体と比べてどうアプローチで問題を解決しているのかということをお知らせできればと思います。子どもや女性や罪のない民間人を攻撃するのは、国際人道法（姜さんは戦争法規とおっしゃった、同じことなんですけれども）、その違反が人権侵害のひとつです。もうひとつがですね、国際人権法というのもありまして、こちらは戦争の時だけではなくて、戦争がない平和な時にも、やはり適応される法律なんです。国際人道法や国際人権法の違反があるかないか。あった場合には、それを解決する方法を考えたり、そういった行為を止めるということをやっております。具体的にどのようにやるのかといいますと、三段階あると考えてもらえばいいのかなと思います。

ひとつはですね、何が起きているのかを明らかにする。調査するということですね。事実を政府が隠していた先ほどのスリランカの例もそうでした。先ほど申し上げたガザの例もそうです。まずメディアが入るのを許さないんですね。政府がメディアが真実を伝えることを拒む。それに対して人権団体が中に入って行って何が起きているのかを知らせる。子どもが、女性が殺されていますよ、白リン弾が使われていますよということを知らせる。こうした調査をして正確にしかも公平にやるかは非常に大事だと思います。なぜなら、いつも紛争の時は必ず、相手を死ぬ程憎ん

でいます。公正にやらないと調査に対して批判が来ます。

何が起きているかまず分かったら、次はメディアに知らせるとというのが二番目の方法です。そして世界中に知らせるんです。そうしますと、誰でも自分がそんな国際的な法律を破ってる、非常に残虐非道なことを自分の軍隊がやっているとか、自分の国がやっているということは知られたいと思われたくないですね。例えば日本では北朝鮮ってひどい国だなと思われていると思いますが、北朝鮮政府の幹部の人たちは、自分たちは人権侵害はやってませんと言うんですね。自分達の名誉みたいなものがかかっていると考えています。そこで、逆にやっているじゃないということ、メディアを通じて世界中に知らせますと、人権侵害をやめると言うことがあります。ただ、メディアに載せただけではやめないという国ももちろん沢山あります。その場合には、世界中の主要な力のある政府とか、国連とかに働きかけてます。この国で起きているこの無差別攻撃を止めるために、あなたの持っている力を使ってくださいよ、というふうに働きかけをするんです。これは、例えばロビーイングとか、政策提言という活動です。ヒューマン・ライツ・ウォッチは、世界中の都市、私の場合日本の首都の東京にいますけれども、例えばもちろんワシントンD.Cとか、ヨーロッパですとロンドン、ブリュッセル、パリ、ベルリン、ジュネーブ（ジュネーブは国連本部のある場所）など、色々な都市にロビーイングをする担当者を置いて、人権の情報を各国の政府に渡して、動いてもらうよう働きかけます。一言で言えば、国際人権法、国際人道法、戦争法規違反がないかウォッチする、世界的な裁判官みたいなイメージを持っていただければいいかなと思います。ただ、裁判官とはいっても、国際的には国内と比べると、世界はまだ遅れております。日本だったら裁判所が判決を出して、悪い奴は刑務所に入れてくれます。ですので、裁判所で判決が下るとこののをみんなすごく恐いことだと思っておりますが、世界的には、そうではないんですね。ヒューマン・ライツ・ウォッチがあなたはとっても残虐なことをして、国際人道法違反ですと言っても全然恐くない。人権法違反を取り締まる裁判所が、まだ小さくて力がないからです。だから、もっとやり続けちゃえというのが、残念ながら世界の現状です。悪いことをしたら、代償を払わさざるをえないという現状を作り出すために、世界的なロビーイングをします。悪いことをしますと、日本の政府から批判される、恥ずかしいとか、どこかの国から武器をいつも輸入してたのに、その輸入が止まってしまうとか（武器の禁輸という制裁）、そういった制裁の発動を求めています。日本の政府にも国際的な悲惨な現状を解決する、止めるために役割を果たして欲しいと思っております、それが私の東京での役割になっています。実は日本って非常に力がある。でも黙っている国。もう少し言葉さえ使っていけば、世界中のこういった悲惨な状況を解決する大きな力を果たすことが出来ると思います。日本は世界第二位の経済大国なんですけど、世界で第二位の人権大国、人道大国として発言してと思われませんか。もちろん違います。もし、日本の首相や外務大臣が世界中の紛争についてしっかり発言したり、外交の場面に出ていかれたりしたら、もっと日本のメディアも取材していると思います。外交のリーダーシップの欠如もメディアの人道問題、人権問題をあまりカバーしないひとつの理由になっているのかなと思っております。

池 上：ありがとうございました。姜さん、今、土井さんがそういうNGOが世界の人権状況をウォッチして、それをみんなに働きかけて動かしていくんだ、日本はもっと発言すべきだというお話がありました。そうなりますと、ではこれからさき国連を含めて国際機関は何が出来るのか、あるいはそこに対して日本は何ができるかという問題にもなってきますよね。いかがですか。

姜 : そうですね。これは非常に難しい問題で、今のところ、かつてウィルソンが作った国際連盟も結局はアメリカは加入しなかったわけですね。それで、これまでのアメリカというのはどちらかというと国際連合に対して、やや冷ややかでした。冷戦時代はどちらかというと、安保理常任理事国の中でも米ソが中心になって、いろいろ苦勞はしてたんでしょうけれども、現在オバマ政権になってかなり国際協調主義を打ち出して、ある意味では国連というものが、非常に重要な役割を果たしうる国際的な環境はだんだん出来つつあると思うんですね。実際に、G20のような形で、今までサミットで取り仕切ってきた先進国だけではなくて、プレイヤーが増えたと思うんです。プレイヤーが増えたということは、それだけ力が分散したということでしょうけど、その中で国家破たんをしたような内戦状態にある国に対して、何が出来るか。それはかつてであれば、冷戦のロジックで、敵の損失は自分のプラスだというようなロジックだったと思うんですけれども、だんだんそれが崩れて来た。ある意味では全員野球で、そういう問題が起きた時にそれが飛散しないように、深刻にならないようにという形で、協力できる可能性は前より増えたんじゃないかと思うんです。そういう中で、日本というのがどういう役割を果たすのか。これはもちろん、安保理の常任理事国というのが強力な力を持っているんですけど、協力できる所は協力して、日本はむしろ常任理事国になってないんですけども、逆に言うとそのイノセントな部分、つまり具体的にこれまで武力で介入してこなかった分、やれる可能性がもっと広いんじゃないかと思うんです。だからその地の利を生かしてもう少しフットワーク良く動いていった方がいいし、それは今、日本にとっては追い風になっていると思います。国家レベルだけではなくて、国民としても、ですからメッセージをもっと出していかなければなりませんし、それから安保理常任理事国が絡んだ問題に日本がどれだけコミットできるのか、これはもう具体的な問題になってきます。外交戦略上、非常に色々なしがらみがあって、難しい問題がたくさんあるでしょうけど、ただ、日本が先進国の重要な一国であることは間違いなし、尚且つそれが中近東、いわゆるアラブの問題、イスラムの問題や色々な問題にどちらかというと、イノセントというかあんまり色々な利権や暴力に加入してこなかったわけですので、もう少しそれを生かしてほしいですね。

池 上 : 分かりました。井上さん、姜さんが国際社会の中での、国際機関としての取り組みに今追い風が吹いていると、そこはもっと日本が機動的にやるべきではないのかというお話がありました。赤十字ってというのはまさにそこを機動的にいつもやっていますよね。

井 上 : はい。まず最初に一言これを付け加えた方がいいかと思ったんですが、国連機能が確かに冷戦後に機能しはじめた。常任理事国等の利害が一致するようになったというか、拒否権を使うことがなくなってきた。PKOの問題についても基本的に様々な決議がなされたりしています。ただ、赤十字にとっては、必ずしも国連の枠組みと足並みそろえてやるとは限らず、一步距離を置いているんです。それはなぜかという、やはり赤十字が中立であるということが非常に重要だからです。国連至上主義というか、国連は最高の善意の集団みたいな、そういう側面がありますが、我々は国連は基本的に政治機構であると、なぜなら国連を構成しているのは主権国家の集まりであるということになると、そこにはどうしても国家の意思とか、あるいは大国の意思とかいうものがどうしても働く。ですからICRCでは例えば国連の安保理決議によってなされたPKOの一環としての活動とは、一步距離を置くという方針をとっています。つまり、赤十字が政治的な意思決定とははなれて厳正に中立を保たなければいけないということです。ですから、一方国際社会

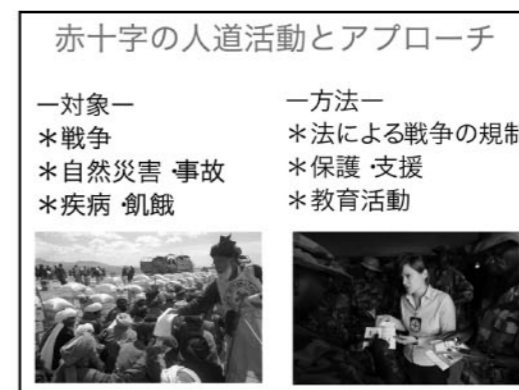
の中での国連機能が強化されて、平和維持活動とか色々な活動は必要ですから、それはそれとしていいと思います。ただ、赤十字は是々非々で必要な場合には国連などの、例えば武装警護も受けたりすることもケースバイケースであるわけですが、ただそこはきわめて慎重である。国際社会で中立というのは、赤十字の立場からは政府側だけでなく反政府武装勢力からも中立とみなされなければいけないわけです。現場サイドでは国連の活動と必ずしも共同歩調を取るわけではないのはそのためです。

池 上 : なるほどね。例えば、国連が経済制裁をしていたりして、そこでは人権状況がひどいからそこに対しては援助しないよという流れの中ででも、困っている人がいれば赤十字は入っていくということですね。

井 上 : そうですね、はい。おっしゃる通りです。赤十字がこれまで150年やってきた活動は大きく分けますと次の図のようになります(資料、14)。まず大きく分けると、戦争・自然災害・疾病、の3つのカテゴリーに分けられると思うんですね。元々アンリー・デュナンの戦争犠牲者への救済から赤十字が始まったわけですが、第一次大戦後、自然災害や疾病の問題にも積極的に取り組んできた。どういふアプローチでこういう問題と取り組んできたかという、3つのアプローチがあったと思います。

ひとつは法による戦争の規制。これは意外に見失われがちで、あまりこの側面が見えないんですが、ある意味で赤十字というのは法律家の集団なんですね。ジュネーブのICRCには法務部もあり、国際法の専門家が沢山います。なぜなら、国際人道法を常に主導して改正しながら、法によって戦争の犠牲者をできるだけ減らそうというアプローチをとってきました。赤十字を作った5人のメンバーのうちに法律家が1人入っていました。

それから2番目の保護支援活動。これは最も赤十字で顔の見える活動で、世界の映像になっているものですね。小川里美さんもこの保護支援活動、プロテクションとアシスタンスといっていますが、この活動が具体的に私たちの日常生活で目に見える赤十字の活動だと思います。ただこのふたつだけでなくもうひとつ、将来への投資、あるいは災害、あるいは疾病の予防という、予防的な観点から将来への教育的な投資活動もしています。これも150年やってきている。この3つを非常に有機的にコラボレーションしながら、赤十字は150年やってきたのかなと考えています。



資料.14

池 上: やっと謎解きをしていただくんですが、この赤十字のパンフレットです。パンフレットの最初の表紙に(資料. 15)、少女はどうしてこういう表情をしているんでしょうかというのがありました。これは井上さん、あるいは土井さんでもいいのですが。

土 井: はい。当ててみます。これは少女兵の写真ですよ。実は18歳にならない子どもというのは、戦争で兵士にはいけないと条約で決まっています。でも、実際には今でも20万人から30万人、少年少女が兵士になっているといわれています。この人もそのうちのひとりですね。戦争に行った人の話を聞くと、本当に悲惨ですね。弾が落ちて来たり、今にも死ぬような所に突撃させられるわけですよ。本当に恐いのに進んで、殺されるかもしれない場面に遭遇する。そして自分が恐いだけでなく、人を殺さなきゃいけないんですよ。そんなことをさせられた子どもの心に与える傷の大きさっていうのは本当に大きい。少年兵や少女兵の話を知るともう胸が痛くて、絶対にこれはなくさなきゃいけないと思うわけです。そんな悲惨な体験をしたから、こういう悲しそうな顔をしているんだと思います。

池 上: そうですよ。だってTシャツにスクールって書いてありますよね。学校のTシャツを着てこれやっているわけですよ。大沢さん、18歳にも満たなくて、でも、兵士なんですよ。

大 沢: 私が18歳の頃なんか普通に勉強して、普通におしゃれして、普通に恋をしてっていう、そういうことが嘘みたいな、環境にいるんですね。なんでこんな罪もない、10代の男女がこうして関わらなければいけないのかって、すごく悲しいというか、大人たちは何をやっているんだっていう感じですね。

池 上: まさにこういう現場で、NGOや赤十字、あるいは国際機関は、取り組みをしているということなんですよ。で、内側のこの四人の家族の写真(資料. 16)は、この謎解きは井上さんをお願いしてよろしいですか。

井 上: これは、赤十字通信です。戦後の昭和20年代から30年代前半までだったと思いますけれども、NHKのラジオでもやってましたね。「尋ね人の時間」とかいう番組があったと思いますが・・・。



資料.15



資料.16

池 上: 恐らくお父さんがシベリアに抑留されていて、そういう人からの便りというわけですね。

井 上: そうですね。赤十字通信は非常に多く残っています。レッドクロス・メッセージといいますが、赤十字通信といって、いわゆる通信手段を絶たれた人々を仲介する赤十字のコミュニケーションシステムがあります。

池 上: 次の写真はリベリアですね(資料. 17)。かつて日本であったのと同じようなことを、今、赤十字はリベリアでやっているわけですね。

井 上: リベリアだけでなく、例えばアメリカでカトリーナという、ハリケーンがありましたね。

池 上: アメリカ・ルイジアナ州で発生したハリケーン。

井 上: そういう時とか、自然災害の時にも行っています。

池 上: さらにには現在ではインターネットも使うわけですね。(資料. 18)

井 上: インターネットも使って、安否調査もします。行方不明になり所在がわからない人々を探すシステムです。レッドクロス・メッセージは、通信システムがない地域で赤十字が手紙で家族間の繋がりを維持するものです。赤十字はどちらかというと、体の問題、命と健康等を守っていると言われますが、心の問題も扱います。心理的な支援、留守家族への心理的なサポートの一環として、こういう安否調査や、赤十字通信というものがあります。ちょっと話がそれますが、国民保護法というのが近年できましたけれども、その法の体系の下では、万が一日本が武力攻撃事態になった場合には、外国人の安否調査を日本赤十字社が中心になってやることになっています。

池 上: そういう仕組みになっているんですね。

井 上: はい。ですから、戦争がないことを願いますが、そういう武力攻撃事態があった場合には、日本赤十字社が中心になって、邦人に対しては自治体がやることになっていますが、外国人については赤十字が仲介する枠組みが出来ています。



資料.17



資料.18

池 上：その仕事の出番はない方がいいですね。

大沢さん、赤十字の仕事って多分、今日聞くまではある種のイメージあったでしょ。

大 沢：はい、そうですね、番組なんかで拝見させていただくと、やっぱりけがをした人たち、病気の人たちに、救いの手を差し伸べているというイメージだったんですけど。

池 上：今聞くと、他にもずいぶん色々ありますよね。

大 沢：そうですね。いろんなことをやっているんだなと思いました。今日初めて知ったことも、恥ずかしながら多いです。

7. 人道と人権について

池 上：それから、それぞれの方から、人道と人権という2つの言葉が出てきました。非常に似ている言葉ですけど。人道法、人権法というのがありました。人道と人権の違い分かりますか。

大 沢：私もよく耳にしますけれども、実際、どう違うのかっていうと、ちょっと分からない部分があります。これはどう違うんですか。

池 上：姜さんの方に向いて今質問がありました。

姜：どうなのでしょう。赤十字の中にはやはりジャスティス、正義、そういうのではないんじゃないでしょうか。

池 上：赤十字に正義はない？

姜：正義を通じて、やっぱり正義というのは法的な概念ですから、そこにはジャッジメントがあるわけですね、これは良いか悪いかと。

池 上：国連組織でいえば、それなりのジャスティスを求めて、いいか悪いかということ判断する。ジャスティスがないというと大変マイナスのイメージに聞こえましたけれども、そうではないということですね。

姜：例えば9.11のアメリカでのああいう悲惨な事態があって、アフガニスタン攻撃が国際法上もジャスティスとして認められるかということ、国際法学者は全部反対したわけです。これは国連の方に従っても、いわば正当防衛とは到底言えないと。それが戦争になったわけで、やがてイラク戦争にまでなりました。先ほど僕は井上さんの話を聞いていて、なるほどと思ったのは、このアフガンについては一応国連決議出ているわけですね。

池 上：出ていました。はい。

姜：では、それと一体化して赤十字が動いた場合どうなっていたんだろうかと。非常に、極端な言い方をすると、タリバンもそれから反タリバン勢力も、生命は一応共有しているわけですね。しかし、悪事を働いているかどうかということについて、あるひとつの基準があって、それについてはやはり裁かざるを得ない。現実的には国連がその問題に関与していると思うんです。つまりそれはいけないという決意を見せているのではなくて、敢えてそこにノンコミットだと、そうすることによって、むしろ裁きにポジティブなことが出来る。ですから、私はもう少し相互補完的に動かなければいけないと思います。全てを正義という形で括っていった場合には、多分それは非常にひどい結果になる可能性があるんじゃないかと思うんです。

池 上：井上さん、アンリー・デュナンが150年前に敵も味方もないんだと、みんな助けるんだよと聞いた時に、すばらしい理想だと、これだよとみんな思ったわけですね。しかし今、現実の問題として、あいつはテロリストだとか、こんなひどいことやってるんじゃないか、そんな連中を助けるのかという批判、議論って起きますよね。これはつまり、150年前にアンリー・デュナンが唱えたことが今でも新鮮であり、また試練にさらされてるってことでもあるわけですね。

井 上：歴史的にそういう非難は珍しくなくて、常にこの150年受けて来たんだろうと思います。それで、姜さんがおっしゃったように正義ということを取って赤十字は入れていないのです。赤十字の基本原則は7つあります（資料、19）。人によってはなんでここに正義の原則がないんだという人もいますが。

池 上：それがさきほど姜さんが、赤十字にはジャスティスがありませんというのは、そういう意味なんですね。

井 上：はい。原則には入ってません。これは色々議論する人もおりますけれども、結局正義の概念というのは相対的ですね。究めて。絶対的な正義があるのかっていうと必ずしもない。ただ、先ほど少し土井さんともお話しした時に、もしあるとしたら、今、法が支配する世界秩序ですから、ある意味で法を守るということが正義なのかなと、言えるかもしれません。ただ赤十字はイデオロギー的な宗教的な正義、例えばイスラムの正義もあるでしょうし、キリスト教文化の正義もあるでしょうし、社会主義国の正義もあるし、北朝鮮の正義もあるし、アメリカの正義もある。ということ考えると、この正義を原則に挙げてもらちがあかないということです。唯一もし、赤十字に敢えて正義があるとしたら、それは犠牲者の利益になるかならないか、そこだけの視点で正義が意味があるかないかっていうことです。犠牲者の利益になるかならないか、そこだけなんだろうと思います。

池 上：その場合の犠牲者って何ですか。要するにそれは傷ついた人？

井 上：はい、傷ついた人ですね。例えば難民、負傷者、そういった人々の命と健康、あるいは人間の尊厳

赤十字の基本原則 (1965年採択、1986年改訂)

人道………人道を目的とする
公平………苦痛の度合いに比例した救護
中立………政治的、軍事的、思想的な中立
独立………政府からの独立と公的事業の補助
奉仕………利益を目的とせず、自発的に活動
単一………どの国にも赤十字社は一社だけ
世界性………世界の赤十字との連帯、協力

を守るということ。それから苦痛の軽減と予防ということ。これらを赤十字では人道の3つの要素と考えていますけれども、この要素を失われた人たちの利益に何ができるかという視点だけが、赤十字が物事を判断する場合の最終的な判断であるだろうと思います。

池 上:なるほど。つまりこの7つの基本原則の中に正義は入っていないけれども、この7つの基本原則を貫くことが、正義なんだと。

井 上:敢えて正義という言葉を使うとしたらですね。そういう意味だろうと思います。

池 上:そういうことですね。大沢さん、赤十字ってそういう組織なんですって。

大 沢:勉強になりました。ありがとうございました。

池 上:先程、第1部で大沢さんがではこれから私たちに何が出来るのかって、聞いたそうでしたね。

大 沢:はい、そうです。実際、やっぱり自分に何が出来るんだろうと考えた時に、いつもそこで悩んで止まってしまう。自分には一体何が出来るんだろうって思うんですけど、実際何をしたいのかわからないというのが現状ですね。

8. 私たちにできること Your Move 「人道的社会の実現のために」

池 上:そうですね。第1部を受けて、では第2部で私たちに何が出来るのかということを考えてきました。先ほど小川さんの報告もありましたが、続いて今度は国内で活動している大学生の石原さんからの報告、お話を聞きます。石原さんお願い致します。

石 原:みなさんこんにちは。群馬県青年赤十字奉仕団の石原浩毅です。これから私が関わっているボランティア活動について、お話ししたいと思います。私の所属する青年奉仕団は、自分達の住む地域で、自分達にも出来るボランティア活動をしています。駅前に立って献血者募集のPRをしたり、児童養護施設を訪問して、子どもたちと一緒に遊んだり、災害が起きた時には、街頭で募金活動をしたりと幅広く活動をしています(資料, 20)。

3年前、私は地元の大学に進学し、高校までとは何か違うことをしようと考えていました。といっても真剣に取り組もうと考えていたわけではなくて、サークルに入らなければ友達ができないかもしれないし、飽きたらやめちゃえばいいかなどそのぐらいの、大した考えもなくボランティアに関わり出しました。たまたま誘われたボランティア部の新入生歓迎イベントに参加して、その部活に入ったんですが、その部活が赤十字の青年奉仕団でした。



資料20

今、言ったように、大した考えもなくボランティアに関わり出した私が3年半も活動を続けてきたことには、2つの理由があります。ひとつめは多くの刺激を得られたこと。ふたつめは、他ではできない体験をすることが出来たからです。私たち群馬県青年赤十字奉仕団では、毎年夏に赤十字の支部が主催して行う宿泊研修にサブスタッフとして参加します(資料, 21)。これは林間学校のようなもので、青少年赤十字に所属する小学生、中学生、高校生が、学年も学校も違う初対面の人たちとグループを作って、2泊3日の日程で共にディスカッションをしたり、とっさの手当の方法を学んだり、フィールドワークをしたりします。



資料21

私は2年前にこのイベントに初めて参加しました。当時の私は何をするのが最も良い方法かわからず、とにかく子どもたちと話すことだけで最終日を迎えてしまいました。そしたら最終日にある子が突然泣き出したのです。彼女はこの三日間がとても楽しかった。グループのみんなと分かりあえたことが本当に嬉しいと言っていました。その子は人に話しかけることがとても苦手で、私が積極的に話しかけた子でした。その子の涙を見た時に、自分でも誰かの助けになれるという満足感でいっぱいになりました。また将来教育の道を選択するにあたって、多くのヒントを得ることが出来ました。このイベントだけではありません。ボランティア活動することで出会った人、得ることが出来た体験がたくさんあります。ボランティア活動を始める前までの私の世界は、家族、友人、自分の住む地域であって、学校の勉強と友だちとの遊びで毎日が過ぎてきました。赤十字のボランティアに関わっていなければ、国境を越えた世界の出来事に思いを馳せることもなく、災害など、人の命と深く関わる事柄について特に考えることもなく過ごしてきたでしょう。ボランティア活動で得たものが私の世界を広げてくれたのです。みなさんの中にも何か始めたいと思っている人がいると思います。何かやりたい、やろうと思っても実際に行動に移すことはとてもパワーが必要なことです。壁にぶつかって悩んだり、仲間と衝突したり。そもそも最初の一步を踏み出すことはとても勇気が必要なことだと思います。でも、恐れていたなら何も変わらないと思います。一步踏み出してみたことが良い変化だったのか、まだ私には分かりませんが、確実に自分が変わったことが実感できます。

私の場合は、奉仕団に誘ってくれた先輩がきっかけでした。そのきっかけの時に自分が感じたこと、その最初の気持ちに少しの勇気を出せば、きっと自分に変化が現れると思います。私はボランティア活動を通じて、世界はとても広く、大勢の人が暮らし、目に見えない絆で繋がっていることに気づきました。ボランティア活動は必ず人と関わります。私自身多くの人に助けられ、今も多くの人に支えられています。何か劇的に変えられるわけではありません。しかし、1人の行動が大きな動きのきっかけを作ることができるかもしれないのです。そのために、私もこの社会の一員として小さなことであっても、何かしら活動して社会と繋がっていきたくと思っ

ています。これで私の報告を終わりにします。ありがとうございました。

池 上: 石原さん、この活動をやってみて石原さん自身、どう人間が変わりました？

石 原: 先程も申し上げたように、ニュースの中の災害であったり、戦争であったり、遠くの世界のことなんですけど、自分と同じ世界のことなんだと思って、関心を向けられるようになりました。色々ちょっと分かりづらくないかもしれませんが。

池 上: 色々な多くの人たちと一緒に行動していくわけでしょ。そういう意味で、人々を組織したり、動かしていく力が身についたという気はしますか。

石 原: はい。一緒に活動するにあたって、自分の気持ちだけで活動してたら、もちろんボランティアの対象の人たちにとっても迷惑になってしまう。なので、仲間とコミュニケーションをとって、どうやったらもっとより良くボランティアが出来るんだろうと、よく話し合うようにしています。

池 上: はい。大沢さん、私たちにも出来ることがあるという、石原さんがやっていること、どうですか。

大 沢: はい。素晴らしい。今おいくつですか。

石 原: 今、22になります。

大 沢: はあ、年下なのに素晴らしい、本当に。そうですね、こんな身近なことでもすぐ出来ることがあるんだと思って、今私にも何か出来ることのヒントをもらったような気がします。

池 上: そうですね。石原さん、大沢さんにこれやったらどうですかって何かヒントあげられますか。

石 原: 身近なことだと、駅前にある献血ルームで献血をしてみてください。

大 沢: 分かりました。O型なんですけど大丈夫ですか。やってみたいと思います。

池 上: あ、そうか。もう本当に身近な所で色々なことができるっていいことですね。とにかく、まず一歩足を踏み出してみるって話でしたね。ありがとうございました。

石 原: ありがとうございました。

池 上: さあ、若者だって一歩足を踏み出すことができる。若者でそろそろなくなった人も今日は会場にいらっやいます。いや、心はみなさん若者なんですけど、何が出来るんだろうという時に、土井さん。

土 井: ちょっと若者じゃなくなったとおっしゃった時、私のことかなと思ったんですけど。私30代になりました、大沢さんより10歳ぐらい上なんです。では20歳の方が出来ることを提案しつつ、

30代、40代、上の方に向けても提案したいと思います。私が思うには本当に一人一人の立場や特徴によって、やれることは違うし、しかもそれで良いという考えなんです。例えば、この中にメディアの方、ジャーナリストの方がいらっしゃるかも。そしたら、ジャーナリズムでできることが沢山あるのは明白ですよ。あと、大沢さんなどのセレブリティの発言が社会に与える力は大きい。日本のセレブリティもいろんなことを最近やり始めていて、大沢さんもやっているのかなと思いますけれども、世界のセレブリティも国際的な人権・人道の前進を率いていらっしゃるような素敵な方がたくさんいます。女優のアンジェリーナ・ジョリーさんですとか、とっても有名です。それだけじゃなくて、ヒューマン・ライツ・ウォッチにも沢山、ハリウッドのセレブみたいな方々がですね、協力してくださっています。

今日、会場にはビジネスマンの方も多と思うんです。ビジネスマンにはお金の貢献ができます。赤十字もただでは絶対にできません。ヒューマン・ライツ・ウォッチも絶対ただじゃできません。また、NGOは中立性とか、公正性を保つために、政府からお金を貰うべきでないですよ。お金を貰えばどこかの政府の下請け機関じゃないかと思われてしまいます。ヒューマン・ライツ・ウォッチやアムネスティでは、政府のお金は貰わないと決まっています。そういったNGOが沢山あります。市民の方々のサポートだけで動いているわけです。もし、ちょっと儲かったから寄付しようとか、貯金から毎月1,000円でも2,000円でもいいから出そうかなということも、とてもうれしいですね。さらに、これだけインターネットが発達してきた現代では、ジャーナリストだけが世の中のことを報道できるんじゃないんです。今では多くの方がブログを持っていますし、ツイッターでも、沢山の人に情報を知らせることもできます。自分のグループの会報みたいなものを出したりとか、自分達が集会を持つとか、多くの人に呼びかける手段をみんなが持っているのが、今の時代だと思います。そこで、今日のスーダンの話や、イラクの話やスリランカの話やガザの話や、自分のメディアで発信してほしいんです。おそらくみなさん多くのことは知らなかったんじゃないかだと思います。それは日本のマスメディアの中で国際報道とか、人権・人道危機のニュースの占める割合が本当に少ないからなんです。私の偏見かもしれませんが、日本は世界で一番くらい国際ニュースの報道が少ないんじゃないかと、色々な国に行っていると思います。そこは市民が自ら、私たちがメディアになるという気持ちで発信していただければと思います。なぜ市民がメディアになるのが大事かという、ただ単に、人々の知識が高まるというのはもちろんのこと、この国内、日本の国の市民の感度、知識レベルが日本の政治を決めるからです。もし多くの人が、国際人道問題に興味があれば、日本のリーダーもこれにコミットしようと思うでしょう。今、日本の外交というのは基本的に二国政府間外交なので、相手の政府しか見てないんです。でも政府から被害を受けている多くの被害者の国民がいたりします。こちらのことは今ほとんど考えられてないのが現実です。ですから、外交の中でも権力を持っている政府だけでなく、国民の目線にもなる、外交を展開していただければと日本政府にいうのは、日本の国民にしかできないことだと思います。私が国際NGOとして世界中の政府の動きを見ていますと、市民がどれだけ、世界的な問題に興味を持って、被害者の立場に立った意見を言っているかどうかで、その国の政府の外交が決まってくると思います。政府は、市民が注文をつければ、殺されていく少数の人たちのことを気にしない。マイノリティーが殺されても、国益には全然関係ないわけだから。そんな外交を変えるには、市民の働きかけに尽きると思います。私たち市民のレベルをどんどん上げていくことによって、日本を変えていくってことが、実は市民みんながメディアになることによって可能だと思っています。

9. 会場からの質問

池 上: はい。ありがとうございました。先ほど会場から質問をいただきました。大変沢山ありまして、そのごく一部しか紹介できないことをお詫び致します。まずは、一人一人の方に質問がきています。まず、大沢あかねさんに質問です。私は現在21歳の大学生なのですが、戦争を知らない世代、世界の悲惨な紛争のニュースを見てもなかなかリアリティを感じる事が難しく感じます。このような私たちの世代に、同じ世代の若者として、大沢さんはどのように関わっていきたいとお考えでしょうか。

大 沢: そうですね。私はけっこう、自分のおじいちゃんが戦争経験をちょっとしているので、よく話を聞かせてもらってますけども、やっぱり経験者じゃないので、リアリティがありません。でもそれを私たちが止めちゃいけないと、いつも思うんですよね。質問にありましたように、例えば私が母親になったら、子どもにこういうことがあったんだよっていうことは、伝えていかなければいけないのかなと、そういう関わり方が必要なのかなっていつも思います。

池 上: はい。聞いてきたことをさらに、あるいは自分が知ったことをきちんと伝えていくことが大切ということですね。

大 沢: はい、そうです。

池 上: 分かりました。井上先生に、赤十字の「愛を实践する技術」とはどんなことがありますか、という質問です。先ほど、エーリッヒ・フロムのお話がありましたけど。

井 上: はい。難しい質問がきましたね。いくつかあると思いますけれども、思いつくままに言うと、やっぱり技術が必要だということになれば、うちの大学の学生は、ある意味で、愛なんて言葉を使わないにしても、人の役に立つため、看護学生ですから、やっぱり技術が必要ですね。だから、今すぐに活動できないにしても、将来人のために役立つということを視野に入れて、今技術を身につけたり、勉強するってことが非常に必要なんだろうと思います。その結果、私の左にいらっしゃる土井さんのようになれる女性もこれから沢山出てくるでしょうし。だから、学んだり将来への投資、ということも充分人類のために役立つので、今やるべきことの第一歩として、これからのあるかもしれませんけれども、自分に対するそういう投資も必要かなと思います。

池 上: 分かりました。私からの関連質問を土井さんに。今、井上先生から土井さんのように、技術を身につけると土井さんのような活動が出来るとありました。土井さんの愛の技術って何ですか。

土 井: 私の愛の技術はですね、うーん、ひるまない。

池 上: ひるまない？

土 井: 井上先生がおっしゃった「私の技術」は、法律なんじゃないかな。あまり絵にはならないので、目立たないけれども、赤十字の中で法律家は、実は法律、戦争法規を守らせるとか作るというすごく大事な仕事をしています、と井上先生もおっしゃいました。例えば、さっきの少年兵だって、

ひどい！あんな子どもたちが少年兵にされてしまったとき、ではそれをどうやってなくすのか。実は法律の力です。ヒューマン・ライツ・ウォッチをはじめとするNGOは、少年兵を禁止するっていう条約をまず作ったんですよ。ヒューマン・ライツ・ウォッチを含め、いろんなNGOが世界中の政府にロビーイングして作ったんですね。10年くらい前になります。作った後、ただ条約破り放題じゃない？という現状を前にして、今度は、破ったらしっかり代償を払わされるシステムを実現するために、今度、国連の安全保障理事会を動かしています。法律家が法律をつくり、非人道的な行為を法律違反にし、法律違反が起きた時にそれが止めさせるようなシステムを作っていくというのは、実はすごく大きな技術だと思います。

池 上: 土井さんへの会場からの質問もあります。先ほどスリランカ紛争の時に、国連機関などが中に入れない中で、赤十字のみが入国許可されたことありましたが、その要因は何でしょうか、という。

土 井: それは非常にいい質問であり、また多分赤十字の本質を語ることになる質問です。また先ほど姜さんもおっしゃった、正義がないっていうところが、ポイントです。要するに赤十字は、私ども人権団体と目的は同じですが、正反対の手段を用いています。何が正義か不正義か、何かひどいことが起きていても外へは言わないんです。これはすごく厳しい守秘義務があるためです。ですので、何かひどいことが起きている戦闘地域にも入って行って、人を助ける。中に入って行って、あなたあんなひどい残虐行為したねと言ってしまったら、追い出されちゃいますよね。そこで非常に厳しい守秘義務を負っている赤十字だけが入っていただけるんです。逆に、赤十字は残虐行為について言いたい、言いたいと思っても言えないわけです。人道機関は、基本的に現場にオペレーションを持っているので、もしキックアウトされたらどうするっていうことをいつも心配していますから、言いたいことが言えないんです。人道団体の宿命ですね。そこはやはり役割分担で、私たちのような人権団体のように、調査はするけれども、大きなキャンプを運営したり、スタッフを沢山現地に置いたりしてはしていないところが、残虐行為の実態をしっかり伝えていくことが必要です。まさに補完的な役割なんですよ。赤十字は、すごく厳しい守秘義務の中で、アクセスをとにかく最重要視するという団体なんです。

池 上: いわゆる人権団体と人道団体という形で分ければ、赤十字は人道団体として、正義がないという言い方は誤解されるので、いわゆる正義をふりかざさないということですね。

土 井: そうですね。要するに、守秘義務を負っているということだと思います。中立、絶対に中立を保つことだと思います。

池 上: それが結局は人権団体からすれば許せないような政権であっても、信頼を得ることによって救出に入ることが出来るということなんですね。

土 井: そうですね。はい。

池 上: 分かりました。ではつづいて姜さんへの質問です。私は幼い頃から学校などで、思いやりを持って接していきなさいと、先生や両親から教えられて育って参りましたが、現代社会で生きていくと本当の思いやりとは何かと考えてしまいます。姜さんが考える思いやりとは何でしょうか。

姜：難しいですね。結局、ある意味で市場原理というのは、私のプラスはあなたのマイナス、あなたのプラスは私のマイナスという、ある種のゼロサムゲームをやらざるを得ないわけですね。本来、市場経済というのはプラスワンのゲームだったんですけど、今はどうやってこちらがプラスであんたがマイナスにするかという。だから結局万人の万人に対するある種のぬげがけ状態というか、ぬげがけを法律の枠内で一番やれる人が勝ち組と最近言われているわけです。だからさっき自殺者の問題が出ましたけれども、ライフリンクの清水くんの話を聞くと、たいいてい自殺をする人は最後に人に迷惑をかけないようにと考える、つまり全部善人だというわけですね。黒澤明の映画に、悪い奴はよく眠るというのがありましたが、まさしくそうなんではないかと。やはり社会に出て、企業に入っているんな所に行くと、学校の教科書で学んだものと、現実の社会の落差に多くの人が悩んだり、苦しんだりすると思うんです。これは当然のことで、その時に早々と大人化する人と、そうではなくて悶々として考えている人がいる。今の僕が目から見て、僕以上に大人化した人もいれば、先ほどの群馬県のボランティアをされている方の例もあるように、僕から見ても非常に初々しいというか、それは両極端だと思うんです。結局我々は職業に就いて労働していますし、どんなにひどいと思われる仕事にも、やっぱり何かしらの意味があるんじゃないかと思えます。

だから、まず思いやりと言うならば、それは自分の労働や職業以外の世界の中でそれを実現しようとするのか、あるいはどんなにこれが他人を搾取すると言われている仕事であっても、必ずそこで人間関係が作られるので、その中で職業を通じて、何か人間性のかけらをそこで実現しようとするのか。働くこととは多分全く別世界で、ボランティアっていうのはそういうことですが、その中での思いやりということと、同時にやっぱり働くということの中で、人間の社会関係の根幹にあるものを考えていくということも大切なんじゃないかなと思うんです。つまり思いやりっていうのは、ひとつは働くということの中で、ギリギリ何かを実現する。どうしても人を手段として扱って利益を極大化しなくてはいけないという時、ギリギリの所で、自分がそのセクションでその人とどういう人間関係を作れるかっていうことに悩んだり、いろいろ働きかけをする余地はあると思うんです。

これはサービス業になればなるほど、ある種のエモーションレイバーというか、感情労働になるわけで、例えば床屋さんに行っても、単に床屋さんの散髪の技術を受けるだけでなく、話をしますね。それは明らかにそこに情動的な関係ができあがるわけです。だからどんな仕事にも私はそれが伴うと思います。そこをやはり大切に。そこから初めて思いやりということが出てくるわけです。自分の日常の労働を離れて何か天下るように思いやりっていうのが出てくるわけではないから。やはりチャリティーが出来る人はお金持ちですね。それはあの、シニカルな言い方をすると、神聖なる魂の淫売と言う人もいます。つまりお金を通じて弱者を救う、それが自分の神に救われる誓いという、キリスト教的なある種の偽善もあるし、でもそうであってもそれは意味があるわけですが。だからどんな立場でも僕は必ず人間関係がある以上、そこを大切に言うって言うことが、一番重要なことかなと思います。

池上：はい、分かりました。質問が私にもきています。コーディネーターで答えて良いのかなと思うんですが、私も答えましょう。これはですね、メディアはどうしても数字に追われて世界の現状より、目の前の芸能人の薬物問題に関心を向けてしまいますと。もっと多くの人たちに世界の問題に関心を持ってもらう。そのためにはどんな報道をすればいいのか。そして受け手はどうあるべきなのかという質問であります。まさに永遠の課題なんですけど、メディアというのは国民あつてのメディア

なんです。芸能人の薬物問題を取り上げると、視聴率が取れてしまうから、やってしまうという部分もありまして、テレビはなんだと言っていると、ある種、天につばをしているという部分も実はあるということがあります。ただしその一方で、メディアの側がまたこういう話をやれば数字が取れるという、変な思い込みがあって、あるいは視聴者を軽く見てしまう部分があって、それだけやっていたらいいんだろうという思いがあります。そうではない。世界のニュースになぜなかなか関心が持てないのかということと、分からないんですよ。なんか複雑そう、難しそうと思ってしまう。そうではない。何が問題なのかということとをきちんと分かりやすく伝えれば、そういうことなのかと、見てくれる人が増える。見てくれる人が増えればもっとそういうことをやって欲しいということにもなる。まずメディアの側が一步踏み出すこと、それが求められているんだろうと私は思っています。そしてこれは最後に、特にどなたということではありません。どなたでもいいです。お答えください。大学4年生からです。希望と絆の未来を構築するにはどうすれば良いんですか。不況の今は何かと生きづらい時代です。世界中の人たちがなんとかして人を大切に、人が希望を持って生きられる時代にしていきたいと思っています。未来を担う青年として何が出来るかお聞きしたいです。いかがですか、井上さん。

井上：今、視線を向けなかったんですけど。

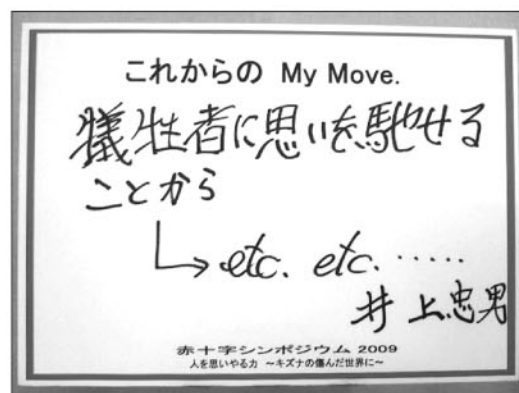
池上：それに気づいたので指名しました。

井上：私は多分、こういうことだと思うんですけど。社会というのが成り立つために、誰かが犠牲になっているっていう事実ですね。犠牲なき社会っていうのは理想なんですけれども、多分犠牲がない社会はあり得ないのかなという具合に思います。例えば派遣切りの問題にしても、切られた人たちがいるお陰ですべて働くことができる。会社が経営できる。あるいは今、僕の好きな讃岐うどんを食べるにしても、うどん粉作ってるのはオーストラリアの日本向けのうどん粉農家の小麦畑が作っている。去年、干ばつで取れなくなって高くなり、日本の讃岐うどんの値段が上がったり、これがグローバル社会だと思います。

それから例えば、ここに携帯電話がありますけれども、この中にレアメタルのタンタルという鉱物が使われています。コンデンサーに使われますが。このタンタルは例えば、コンゴ民主共和国の反政府ゲリラ等が支配している地域で取れる。西側諸国がレアメタルをこぞって欲しがっている。そして、僕がこれを買うということはおそらく、何らかの形で反政府ゲリラが介入し、彼等は高い値段で売るわけですね。それでAK-47を買って武装闘争に使ったりする。という具合に、僕達の意識するしなないに関係なく、世界のグローバリズムの相互依存の構造の中に僕達が組み込まれてしまっている。自分で選択できないわけですね。そういう中で何を考えるかということ、僕達が生きていることはおそらく、他者の犠牲の上に成り立っているんだろうっていうことが単純に考えられる。であるとしたら、そういう中でできている共同体の一員として、我々は何をすべきかと。人が身代わりになってくれているために、今自分が存在していると、こういう感性を今の時代の人たちはもう持たざるを得ないんじゃないかなと思うんです。そういう意識の中から、自分は社会の一員として何をやるかということが出てくるんだろうと思います。だからそういう世界の構造とか、自分が生きることが、他者の犠牲の上に成り立っているという現実を理解することが、赤十字運動につながるでしょうし、いろいろなボランティア活動になるかもしれない。そういう思いが必要なんではないかなと思います。

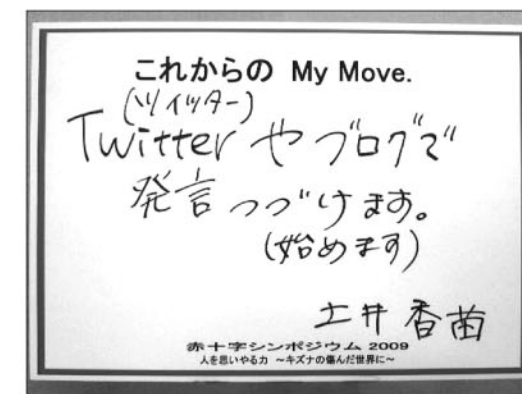
池 上: まず、そこから始めるということですね。分かりました。それでは「Your Move」そして「My Move」、あなたは何が出来るのかそして私はなにができるのか、パネリスト4人の方にその「My Move」私はこれからこういうことを取り組んでいこうと思いますということを書いていただきます。よろしいですか。これを書いていただいでみなさんにお見せし、それについての説明をひとことお願い致します。誰が書いたのかという意味で最後に名前も書いてください。では井上さんからまいりましょうか。一番前にそれを出していただけますか。「犠牲者に思いを馳せることからetc.etc.」と。どういうことでしょうか。

井 上: 具体的な行動というのは色々あると思うんですが、敢えてそれは棚上げしておいて、今申し上げました相互依存社会に生きていることを自覚することです。自分が生きているってということが、自分が知らない他者の犠牲の上になりたっているという実感。これを持つことがこういう時代に生きる共同体の一員としての、敢えていえばたしなみですか。これがあれば後は行動に行ける。いろいろな所でそういう機会がありますから、そういう思いを常に持ち続けているかどうかが大切。要するに、他者への関心、そういうことだろうと思います。とくに、犠牲にされている人。犠牲者のお陰で今の自分がいるという感覚を持ち続けることです。



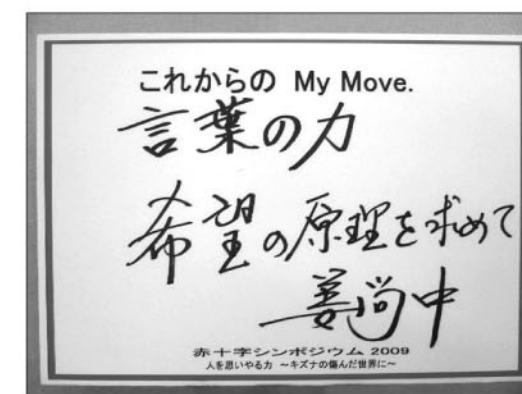
池 上: 分かりました。では、土井さんお願いします。「ツイッターやブログで発言続けます。発言始めます」

土 井: はい。先ほどみなさんに、最近インターネットが発展したから誰でもメディアになれるので、色々な人道危機の状態などを、発言してくださいと言いました。言ったからには、自分も発言します。出来ることから始めようということで、最近ツイッターを始めました。発言できるのに、しないのは駄目ということで、ちょこちょこつぶやいています。ブログはまだないんです。今作っている最中なので後1ヶ月くらいでなんとか作って、そして自分に出来る発言をしていきたいと思っています。



池 上: では姜さんお願いします。「言葉の力、希望の原理を求めて」

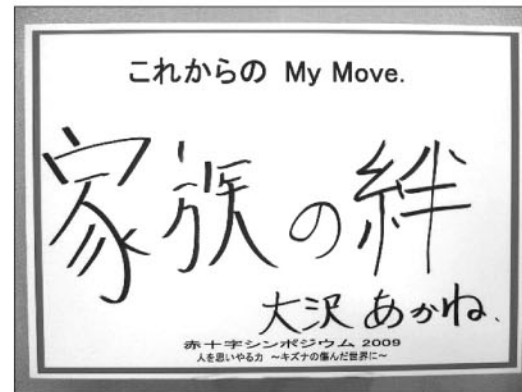
姜 : 最近ちょっとオートバイを動かしてみたら、動かせなかったんですね。やっぱり自分の体力が落ちた。そうすると自分に何があるだろうと。やっぱり言葉しかなくて。言葉の力を信じてっていか、政治家も言葉の力ですし、文学も言葉の力ですし、言葉の力を信じていきたい。学生時代あんまり難しく僕は途中で放棄したんですが、エルンスト・ブロッホという人が「希望の原理」という本を書いているんです。先ほど絆と原理といわれて、やっぱり希望の原理って何なのか、それについて僕なりに言葉の力を通じて、自分が発見したい。多分それは発見できなくて問い続けることが自分のこれからの仕事かなと思います。言葉を通じて。そしてそれが結局「希望の原理」に繋がればいいなど、ちょっと期待値をかけてですね。



池 上: 分かりました。大沢さんは「家族の絆」

大 沢: はい。私、今日ここに来て、こんなたくさんのお客さんの前、そしてこんな偉い先生方たちの中で、一体何を話せるのかなとか、何が言えるのかなってすごく悩んでたんです。先ほども言いましたけど、やっぱり自分はどこかで被害者になりたくないとか、関係ないとかって、今日ここに来るまで思っていたんですけど、なんかそうも言ってもらえない。今日のみなさんの発表を聞いて、よその国のことだからとか言ってもらえないし、日本も決して良い現状ではないじゃないですか。なので私にまず出来ることは、その家族の絆、一番大切な身近な家族だったり、恋人だったり、友達との絆を深めることから、そして、先ほど石原さんから言ってもらいましたけれども、献血。それがまず私に出来ることなのかなと思います。あとは、どんどん絆を深めていく中で、こうい

う地球上の、海外での色々な悲しい現状が起きているってことを知るといふことにも責任があるんだなっていうのを今日感じました。知るといふこともひとつの大切なことなんだなと思って、もっともっと、私も、土井先生がおっしゃったブログとかで、周りの20代の友達にも、こういう現状があるんだよっていうのを伝えていきたいなと思いました。



池 上：大沢さんのブログ、みなさんが読んでくださいますからね。そこで、言葉の力で発信してください。

大 沢：はい。ありがとうございます。

池 上：ありがとうございました。議論を締めくくるにあたって、赤十字国際委員会の元副総裁ジャン・ピクテの言葉をご紹介します。ジャン・ピクテは人道活動を阻む私たちの心の中にある障害を人道の4つの敵と呼んでいます。4つの敵とは何か（資料. 22）。

第1の障害は、人間の利己心です。争いが起きると文明の薄いメッキがすぐに剥がれてしまいます。確実に人を殺してしまいます（資料. 23）。

そして第2の障害、それは無関心です。先ほど井上先生もおっしゃいました、被害者への関心が必要なんだということだろうと思います（資料. 24）。

そして第3の障害は、理解力の不足です。認識の不足が危険をもたらすということです（資料.25）。

そして第4の障害、想像力の欠如です。他人の苦しみや痛み、それを自分のことのように感じる事ができるのが想像力なのに、その欠如は、やはり敵になるということですね（資料26. 27）。



資料.22



資料.23



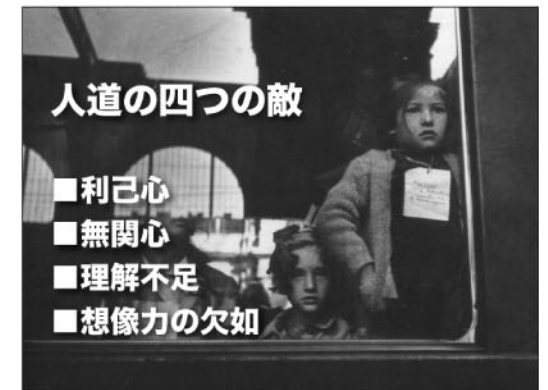
資料.24



資料.25



資料.26



資料.27

私の大好きな言葉に「想像力は世界を救う」というのがあります。人間だけが持っている能力。目の前に、見えないけれども、どこかで悩んでいる人がいる、苦しんでいる人がいる。そこに対する想像力を働かせることによって、私たちは動き出すんじゃないかと思えます。そして様々な活動をしている人たち、どうしてそんな辛い活動をしているんだろうか。先ほど小川さんがイラクの看護師の発言をご紹介くださいました。患者がいるんだから見捨てるわけにはいきません。だからこんなひどい状態でも病院にやってくるんです、というお話がありました。自分を頼りにしてる人がいる。それが結局は自分の生き甲斐にもなっていくんじゃないのかなということを強く感じました。そして若き石原君が、とにかく一歩踏み出すことですよということをおっしゃってました。自分が一歩踏み出すことによって、彼自身が大きく成長したんだということですね。つまり、人助けをするんだけど、それが結局は自分の生き甲斐になり、自分が成長していくことにも繋がる。それが人間の絆を強くしていくんだろうと私は思いました。今日は長い時間ありがとうございました。

7頁資料.3・4、16頁資料.6・7・8・9、17頁資料.10・11・12・13、22頁資料.14、23頁資料.15・16、24頁資料.17・18は、赤十字国際委員会（ICRC）の提供です。

発行日 2010年2月
発行元 日本赤十字社
〒105-8521
東京都港区芝大門1-1-3
TEL:03-3437-7087
FAX:03-3435-8509